

---

# 明日の王子 - ノーデルシアの勇者 第三章 -

bunz0u

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

明日の王子 - ノーデルシアの勇者 第三章 -

### 【Nコード】

N6790U

### 【作者名】

bunzou

### 【あらすじ】

あるところにノーデルシア王国という国があった。大きく、歴史のある国で、今の王は異世界からの人間を妃としていた。今から十五年前、その妃ともう一人のタマキという男が勇者として召喚され、その男は魔族やその他の脅威を見事に打ち払い、一人の女性とこの世界から姿を消した。それは、今ではすでに伝説として語られている。そんな世界が始まる、一人の少年の旅の物語。

## 旅立ちの決定

あるところにノーデルシア王国という国があった。大きく、歴史のある国で、今の王は異世界からの人間を妃としていた。

今から十五年前、その妃ともう一人のタマキという男が勇者として召喚され、その男は魔族やその他の脅威を見事に打ち払い、一人の女性とこの世界から姿を消した。それは、今ではすでに伝説として語られている。

そして現在。王の長男であるアランは、父であるエバンスに呼ばれてその私室に向かっていた。その姿はどことなくおっとりした雰囲気、比較的小柄な体に柔らかな黒髪をしていた。アランが部屋に入ると、そこには母であるヨウコもいて、両親が揃っていた。アランは二人の向かい側のソファに座って、話を聞く姿勢になった。「今日お前を呼んだのは重要な話があるからだ」

まずエバンスが口を開いた。アランはそれを聞いて軽く首をかしげる。

「あらたまってどういことですか？」

「簡単に言おう。お前には王子としての地位を捨ててもらおう」

「え？」

アランは間の抜けた声を出して、少しの間言われたことを理解できなかった。

「それは、どういうことなんですか、父さん？」

「旅に出るということだ。お前にはその中で見聞を広げ、力をつけてほしい」

「旅に、見聞？」

「父さんはあなたに勇者になつて欲しいのよ」

アランはまだ混乱していたが、ヨウコに勇者と言われて驚いたようだった。

「勇者？ 僕にあの伝説の勇者のようになれと言っんですか？」

「その通りだ。お前にはそうなる資質がある」

エバンスの淀みのない言葉に、アランは少し落ち着いたようだった。そしてヨウコの顔を見る。ヨウコはうなずいてから、口を開いた。

「私の故郷には、可愛い子には旅をさせろっていう言葉があつてね。もちろんそれだけじゃなくて、他にも理由はあるの。アラン、あなたには勇者の資質があるけど、王には向いていない。今回のことはそれも大きな理由なのよ」

「そうなんですか」

アランはうつむいてから、顔を上げる。その表情にはさっきまでの戸惑いはなかった。

「わかりました。父さんにも母さんにも考えがあるのでしようし、僕は旅に出ることにします」

それを聞いたエバンスは深くうなずいた。

「供の者は二人、私が指定する。出発はまだ少し先だが、心構えだけはしておくのだぞ」

「はい」

アランは部屋を退出し、自室に戻った。それからすぐに自分のベッドに飛び込み、しばらくの間じっとしていた。

ドアがノックされ、アランの返事を待たずに誰かが部屋に入ってきた。

「アラン様、こんな時間にお昼寝ですか？」

アランは体を起こして部屋に入ってきた者を見た。一見したところただの眼鏡をかけた侍女だったが、それにしては遠慮がない感じではある。

「エリル、別に僕は寝ていないよ」

「それならいいですけど、そのご様子ですと、何かあったのでしょうか？」

「まあ、何かあったんだよ。詳しいことは明日にでもなればわかるさ」

「そうですか。それより、そろそろ訓練の時間ですが」

「そうだったつけ。まあすぐに行くから」

「はい」

アランはベッドに座った状態のまま、しばらくそのまま時間が過ぎた。

「先に行つててくれていいんだけど」

「いいえ、一緒にさせて頂きます」

「わかったよ」

それからアランは立ち上がり、大振りなナイフが二本差してあるベルトを取り上げて装備をした。

「じゃあ行こう」

二人は連れ立って城内の訓練場に向かった。そこでは何人も兵士が訓練をしていたが、アランが姿を見せると、少しの間だけ手を止めた。そして、その中から髪のは半分は白くなっている、一人の中年の男が歩いてくる。

「少し遅刻ですよ、アラン様」

それにはエリルが頭を下げた。

「申し訳ありません、バーンズ様。アラン様はお昼寝をしていらっしやったのです」

「そんなことはしてないよ」

バーンズはその会話に笑ってから、手に持っていた剣を肩にかついだ。

「ではアラン様、始めましょうか」

それから訓練場の中心で二人は向かい合った。

「いつでもどうぞ」

バーンズの言葉を合図に、アランは二本のナイフを抜いた。そしてバーンズを中心にしてゆっくりとその周囲を回り始めた。それに合わせてバーンズもわずかに体の向きを変えながら、常に剣の先端でその姿を捉え続ける。

数分がその状態で過ぎたが、アランはスピードを上げると姿勢を

低くして一気に前に出た。バーンズは横にステップしてそれをすかそうとしたが、アランは急激に方向転換をしてそれを追う。

だがそれよりも早くバーンズが剣を跳ね上げると、アランはそれをよけられずに二本のナイフを交差させて受ける。その勢いでアランの体は吹き飛ばされたが、すぐに体勢を立て直して跳んだ。そのまま空中でナイフを逆手に持ち替え、それを上から振り下ろした。

バーンズはそれを素早く後ろに下がってかわすと、振り上げていた剣を着地したアランに向けて振り下ろし、アランの寸前で止めた。それからバーンズとアランは同時に武器を引いた。

「さすがです、アラン様」

「またまた。軽く一本取ってたじゃないか」

「いいえ、ぎりぎりでした。アラン様が力を使えば、私には防ぎきれませんでしたよ」

「そっちだつて、その剣の力があるじゃないか」

「それでも、ほぼ五分だと思えますよ」

アランが頭をかいてからナイフを収めると、バーンズも剣を背中  
の鞘に戻した。それを見ていた兵士達は全員軽く拍手をしていた。  
アランはそれに軽く手を振って応えてから、訓練場の隅に行つて座り込んだ。

「また勝てませんでしたね」

そこにエリルがタオルを持って近づいてきた。アランはそれを受け取って顔をぬぐった。

「別にいいよ。お互いに本気じゃないんだしね」

「そんなことでは実戦で足元をすくわれますよ」

そこでアランは大きくため息をついた。

「それもそうか。あんまりのんきなことも言っていられないかな」  
その反応にエリルはいつもと違う雰囲気を感じた。しかし、それを追求することはしなかった。アランはしばらくそのまま休んでいたが、しばらくすると立ち上がってタオルをエリルに返し、ナイフを抜いてお手玉を始めた。

バーンズはその様子を見て、タオルを手にアランの側から離れたエリルに近づいていった。

「アラン様はどうかされたのか？」

「詳しくはわかりませんが、今日は陛下から何かお話があったようですから、その件ではないでしょうか」

「あのご様子では、よほど重要なことだったのだろう」

「私が聞いてみましょうか？」

「今の様子が続くようなら、そうしたほうがいいかもしれない。だが、エバンズ様から何か話があるかもしれない」

「ということはバーンズ様にも関係のあることなのでしょうか」

そこでエリルは訓練場の入口に自分の同僚の姿を認めた。その同僚はバーンズとエリルを見つけると、早足で近づいてくる。

「お二人とも、陛下が呼びです」

## お供や妹

同時に呼び出されたバーンズとエリルは王の執務室に来ていた。室内に入ると、そこにはエバンスが一人で机についている。

「二人ともよく来てくれた。重要な話があるから、とりあえず座ってくれ」

その言葉に従い、二人は椅子に座る。

「話というのはアランのことだが」

エリルはそれに反応してわずかに眉を動かした。エバンスはそれに気づき、微笑を浮かべた。

「気づいていたか」

「いえ、それはアラン様の様子がいつもと違ったもので」

「さすがだな。それだけアランのことを気にかけているのなら、私のほうも安心して頼める」

エリルはおとなしく続きを待ったが、バーンズは口を開いた。

「エバンス様、まさかあれを実行する、ということなのですか？」

「そうだ」

エバンスとバーンズは互いに何を言っているのかわかっているようだったが、エリルはわけがわからずに黙っていた。バーンズはそれに気づき、エリルに顔を向ける。

「これは王とごく一部の人間しか知らないことなのだが、アラン様が我が国を離れ、旅に出るという計画があるのだ」

「アラン様が旅に？ それはまたどうしたわけなのでしょうか？」

「数年前から考えられていたことだ。最大の原因はアラン様の力と、その人格にある」

「それは、どういうことなのでしょうか？」

エリルのその質問にはエバンスが答える。

「知っての通り、アランは二種類の精霊の加護を受けた身だ。それだけでなく、魔力も常人の比ではない。そして、アランの性格は、



お前達ならよくわかってるだろうが、王というものには向いていない」

確かに威厳のようなものとは無縁だ、とエリルは黙って考えた。

「だから、アランには勇者になってもらう。持って生まれた力を使いこなせば、それも可能であろう。もちろんそのためには信頼できる仲間の存在が不可欠だ」

「仲間、ですか。それが私とバーンズ様なのでしょうか」

エリルの言葉にエバンスは力強くうなずく。

「そうだ。だが、それだけではない。旅先では名は知られていなくとも実力のある人物とも出会っだろう。それもアランならきっと仲間となることができる」

王子を旅に出すなどと言うと、何があったのか思うが、エバンスの言葉からはアランへの信頼しか感じられなかった。

「そういうことから、お前達二人にはアランの供として一緒に旅に出てもらいたい」

エリルはすでにそれを予想していたので、驚きなくその言葉を受け入れた。

「はい。もちろん私はアラン様と一緒に旅に出ます」

「私も異存はありません」

エリルとバーンズの同意の言葉にエバンスは微笑を浮かべた。

「お前達ならそう言うってくれると思うていた。出発はまだ先になる、それまで引継ぎの準備をしておいてくれ」

「はい」

そう言うて二人は執務室を出た。そのまま並んで歩き出す。

「引継ぎと言ってもバーンズ様は色々と大変そうですね」

「いいや、私がいなくなっても問題はないようにはしてある。あと数年もすれば引退するつもりだったことだし、ちょうどいい機会だ」

「剣は持っていくんですか？」

「もちろん持っていく。あれは人気がないし、それに、タマキ様から私が頂いたものだ。それより、お前のほうはどうなのだ？」

「私は特に身寄りもありませんし、アラン様のお供ということならば、それほど変わることもありませんから」

「そうか」

それから二人は別れ、エリルはアランの私室に向かう。だが、その途中で別の人物につかまることになった。

「エリル、兄様はどこかしら？」

アランの三つ下の妹、王女ハーシェだった。アランと同じように豊かな黒髪だったが、聡明さを感じさせる風貌で、雰囲気だけならアランより大人びているようにも見える。

「今はお部屋だと思いますが」

「そう。じゃあ一緒に行きましょう」

ハーシェは返事を聞かずに先に歩き出した。

「ところでエリル、最近の兄様はどんな様子なの？」

「特にお変わりはありません」

「変わりが無い、ということはないんじゃないの？」

立ち止まり振り返ったハーシェは微笑を浮かべていた。一見したところ裏がないように見える笑顔だったが、エリルにはその裏が感じ取れた。

「お父様とお母様に呼ばれているのだけど、これは兄様のことよね」  
エリルはこの聡明な王女には隠してもしょうがないし、その必要もないだろうと考えた。

「はい。私もそのことで陛下からお話を頂きました」

「つまり、兄様は旅に出るのね」

「そこまでご存知だったのですか」

「ええ。それで、あなたの他には誰が一緒に行くの？」

「バーンズ様です」

それを聞いたハーシェはにつこりと笑った。

「それなら二人だけでも安心ね」

そうしているうちにアランの部屋の前に到着した。

「アラン様、アラン様」

エリルが声をかけたが、何の反応もなかったので、そのままドアを開けて室内に入った。アランはまたベッドに転がっている。ハーシエはそこに静かに近づいていった。

「兄様、お疲れのようですね」

ハーシエがベッドの側に行つて声をかけると、アランはのそりと起き上がった。

「どうした、何かあったのか」

「いいえ。ただ兄様のご様子が気になったのもので」

「別に大丈夫だよ。僕よりもこれから大変なのはお前のほうなんだから」

「兄様、大変つていうのはなんのことですか？」

笑顔のハーシエに、アランは軽くため息をついた。

「お前のことだから全部わかつてるんだろ」

「やっぱり兄様は私のことならお見通しなんですネ」

「まあ、妹だから。というより、お前なら大体知つてると思えば間違いないじゃないか」

「それは買いかぶりすぎですよ。私は兄様にはかないません」

そこでドアがノックされ、影のようにハーシエに付き従っていた侍女がポットを乗せたお盆を持って入ってきた。

そしてテーブルの上にそれを置いて、お茶を二杯入れた。ハーシエはそこに移動してカップを二つ取り上げると、ベッドに腰を下ろして、一つをアランに差し出した。

エリルはそこでハーシエの侍女に目配せをして、二人で部屋を出て行った。

「兄様、旅に出たらどこを目指すのですか」

「そうだな、最近新種の魔物が出てるっていう話も聞くし、そういうのがたくさんいそうなところにも行ってみることにするよ」

「辺境だと中央の手がまわらなかつたりしますし、兄様が行くと色々と助かることもあるのではないでしょう」

「ああ、そうしてみるよ」

そこで会話は途切れ、二人はしばらく黙ってお茶を飲んでいた。しばらくして、ハーシエは真面目な表情になった。

「後のことは私もちやんとしておくから、兄様は心配しないでね。必ず旅はうまくいくって信じてるから」

「たぶん大丈夫さ。お前のほうこそ、病気とか気をつけてな。何かあったら呼んでくれれば戻ってくるから」

「はい」

ハーシエはそこで満面の屈託ない笑みを浮かべた。アランはなんとなく手を伸ばしてその頭を撫でた。ハーシエは目を閉じてされるがままにしていた。

## 準備週間

一週間後。旅に出る三人はそれぞれの準備を大体済ませていた。アランはこのために作られた旅装を身につけていた。

基本的に軽さが重視されていて、部分的に鋳が打たれた皮で補強されている程度ものだが、布地は上質で、腰と体に巻かれたベルトには二本のナイフと様々なものを収納できるようになっている。それから薄手の皮のグローブと、つま先が強化されたブーツを履いた。それから自分の姿を鏡に映して確認していると、ドアがノックされエリルが入ってきた。エリルはアランの姿をざっと見てから口を開く。

「よくお似合いですよ」

「それより、エリルは準備しなくてもいいのかい？」

「私はいつでも準備できています。まあ今回は新しい武器がありますから、少し使い方に慣れる必要はありましたが」

「新しい武器？」

「はい。かなり変わったものですから、楽しみにしてください」

「着るものは？ まさかその服じゃないよね」

「もちろん私にも旅装がありますよ、由緒正しいスタイルのものが。それよりアラン様、せっかくですから、その格好で体を動かされてはどうですか？」

「それもいいか」

アランは立ち上がって部屋を出た。それからエリルを従えて訓練場に向かう。そこではバーンズが若い兵士達を見守っていた。ただ、自分では指示を出したりはせず、自分よりも若い騎士に任せている。バーンズはアランとエリルに気がつき、二人に近づいていった。

「それが旅装ですか。いいものそうですね」

「まあ、母さんが作ってくれたものだしね。それより、そっちの旅装は？ その鎧じゃ重過ぎると思うけど」

「もつと軽装の鎧がありますから、出発する時はそれにします」

「それなら、出発の日を楽しみにしておくよ」

「アラン様！」

そこにアランを呼ぶ声が響き、ローブ姿の男が駆け寄ってきた。

「ミニツクか、何か用かな」

「新しい発明を試していただこうと思ったんです」

「新発明か、今度は何？」

「これです」

ミニツクは左手用のガントレットを取り出した。アランはそれを受け取って適当にこねくりまわしてみた。

「これにはどんなカラクリがあるのかな」

「いくつか魔法を発動できるように仕込んであるんですよ。魔力も三発ぶんくらいは溜めておけるので、いざという時に役に立ちます」  
「へえ」

アランはそれをグローブの上から左手に装備してみた。サイズはぴったりで、手を動かすのにも邪魔にはならない。

「それで、魔法の発動は？」

「指の動きで使えるようにしてあります。今から説明しますので試してみてください」

それからミニツクは三種類の指の形の組み合わせを示した。

「発動する時は手を開いてください。とりあえず最初のものからどうぞ」

アランは誰もいないほうに手を向けると、ゆっくりと二つの指の形を作った。それから手を開くと、それと同時にガントレットを中心として魔法の盾が展開された。

「なるほど、これは便利そうだ」

「そうですね。あとの二種類はバーストとライトニングボルトを改良したものになっています」

「まあ、使ってみようか」

二つ目は狭い範囲だが鋭い爆発を起こすバースト。そして、三つ

目はガントレットから一瞬だが強烈な雷が発生した。ミニックはそれを見て満足そうにうなづく。

「名づけてライトニングハンドと言ったところですね」

「これは基本的に接近戦用っていう感じが」

アランはそうつぶやいてから、左手のガントレットをじっと見つめた。バーンズもそれを見て、感心したような表情を浮かべる。

「使いどころが難しそうですが、切札になりそうですね。さすがだな、ミニック」

「それはまあ、なんといつても僕は天才宮廷魔術師ですからね」

自分に酔っているようなミニックだったが、周囲の人間はそれに慣れているので特別相手にもしない。バーンズはミニックから目をそらして、アランに向き直った。

「アラン様、それも使って体を動かしてみますか」

「そうしてみよう。誰か相手をしてくれるかな」

「では私が」

アランとバーンズの話の聞いていた若い騎士が名乗りを上げた。

アランはうなずいて一歩前に出る。

「ありがとう。じゃあ、軽くやってみようか。魔法は軽くありで」

アランはナイフを両手で抜き、騎士も腰から剣を抜き、構える。

アランは半身で若干腰を落とした体制で左手を前に出し、右手は後ろに引いている。

バーンズとの時とは違い、アランはじりじりと前に出ていく。騎士はそれに向かって左手を突き出した。

「アイスバイト！」

一発の氷の牙が放たれる。アランは左手のナイフを空中に放り投げ、ガントレットから魔法の盾を展開させた。氷の牙は砕けたが、騎士はそれを追うようにして剣を振るう。

アランは勢いよく前転してそれを潜り抜けると、その体勢のまま足払いを仕掛ける。騎士はよろめきながら前に出てアランと距離をとってから、体勢を立て直して振り返った。

アランはいつの間にか放り投げていたナイフを再び左手に持ち、最初と同じように構えると、今度はまっすぐに騎士に向かって走る。騎士もそれに呼応して走り出した。

剣が振り下ろされると、アランは左手のナイフでそれを受けると見せ、その手を放した。ナイフは地面に叩きつけられるが、身をかわしていたアランはそのまま体を回転させ、右手のナイフを騎士の首に突きつけた。

「参りました」

騎士が剣を鞘に収めると、アランもナイフを引いた。

「相変わらず無茶な戦いかたをしますね」

エリルがタオルを持って近づいてきた。アランは落としたナイフを拾って収めてから、それを受け取る。

「これが僕にあつてるんだ。それに、このガントレットも使えそうだし」

「まあこれからは小言を言われることもなくなりますからね」

「それはいいことだね」

アランはタオルを首にかけて、騎士のほうに歩み寄る。

「相手をしてくれてありがとう。いい練習になったよ」

「いえ、私のほうこそ、お手合わせいただいてありがとうございました」

騎士は一礼するとその場をあとにした。次はそこにミニックが嬉しそうな顔をしてきた。

「さすがですね。ああ、発動の停止はこう人差し指を立てて回せばできますから」

「なんだ、気づいてたんだ」

アランはそう言うってから教えられた通りにした。

「これはいいね、僕の戦いかたによくあつて。しばらく借りておくよ」

「もちろんです。というかそれはアラン様のために作ったものですから、存分に使ってください」



「そういうことなら、ありがたくもらっておくよ」

「では、僕はまた新しい発明に取り掛かりますから、失礼します」

ミニックは訓練場から走って出て行ってしまった。

「相手の体勢を崩した隙に隠れて攻撃を準備しておくとは、いい手段ですね」

バーンズがそう言うと、アランは軽く肩をすくめる。

「ギャラリー相手でもばれたら駄目かな。次はもっとうまくやりたいね」

「もう少し品のある戦いかたをされてもいいとは思いますが」

エリルの言葉にアランは特に反応はしなかった。

## 静かな出発

それから三日後、早朝にアラン、バーンズ、エリルの三人はそれぞれ旅装になって城の裏門に集まっていた。そこには荷物が満載された荷馬車が一台と、ヨウコとシェーラが来ていた。

「私からみんなに渡すものがあるの」

ヨウコはそう言う三人にそれぞれ何かを手渡した。アランがそれを見てみると、それは狼の顔のような形をしていたアミュレットだった。

「ありがとう、母さん」

まずアランがそれを受け取り、首からそれをさげる。バーンズとエリルも同じようにした。続いてシェーラがまずアランに歩み寄ってその手をとった。

「兄様、道中のご無事を祈っています」

「もちろん大丈夫」

それからシェーラはバーンズとエリルにも一言ずつ声をかけた。

その間にアランは二人の旅装を確認する。

バーンズは普段身につけている重厚な鎧ではなく、基本的に皮で、急所は金属のプレートで覆われている。そして背中に剣を背負い、長いマントを身にまとっている。

エリルは髪を思いっきり短くし、全身皮の装備で身を固め、その腰のベルトには短剣くらいのサイズの棒のようなものが四本装備されている。あれが新しい武器かとアランには予想がついたが、どう使うのかはわからなかった。

そうしているうちにシェーラはヨウコの隣に戻り、エリルが御者台に座る。バーンズも荷台に乗りアランに手を差し出した。アランはその手をつかんで荷台に乗り込むとヨウコとシェーラに軽く手を振った。

「じゃあ、行ってくる」

馬車は城門を通過した。見送りの二人は馬車の姿が見えなくなるまで見送り、それから城内に戻っていった。

しばらくして、馬車は町を出て街道を進んでいた。  
「それにしても、一国の王子の旅立ちにしては静かに出発できましたね」

エリルは前を見ながらそう言った。

「父さんがうまくやったからね。僕にはとても真似できない」

「シェーラ様も協力されていたようですが」

「あいつはできる子だからな」

「少しは見習っていれば、こうして旅に出ることもなかったかもしれないですね」

「僕にはこのほうが性に合ってるし、父さんも母さんもそれがわかってるんだよ。感謝してるさ」

「そういうことなら、親孝行をしないといけませんね」

アランはただうなずくだけで、特に返事はしない。少しの間全員が黙っていたが、おもむろにバーンズが口を開く。

「ところでアラン様、目的地はどこにするんですか」

「とりあえず新種の魔物が出るっていうところでも目指そうと思うんだけど、具体的にはどこがいいかな」

「北のブレイテンロック共和国との緩衝地帯に向かうのがいいかもしれない。未確認ですが魔物の噂が一番多い地域ですから」

「それなら何度か行ったこともあるし、ちょうどいいか」

その会話を聞いていたエリルは大きくため息をついた。

「てきとうな決め方ですね。まあ、とりあえずそうしてみましよう」  
それから一週間。一行は小さな町に到着していた。アランは宿の部屋に入ると、すぐにベッドの上に体を投げ出した。エリルは荷物を置きながらその様子を冷ややかに見る。

「まだ先は長いんですから、今からその調子では大変ですよ。ずっと野宿が続くことだってあるんですから」

アランは軽く息を吐いてうつぶせになる。

「そんなこと言っても、こういう旅は初めてなんだからしょうがないじゃないか」

「私もこれほど楽な旅は初めてです。バーンズ様が情報収集をしている間に、私達はここから先の計画を考えないと駄目ですよ」

「帰ってくるまで待ったほうがいいじゃないか」

「のんびりするならそれもいいですが、そういう旅ではありませんからね」

エリルにそう言われると、アランは渋々と体を起こした。

「わかったよ」

エリルはその姿を確認して、荷物から地図を取り出してテーブルの上に広げる。アランはベッドから椅子に移動してそれを覗き込んだ。

「この町はここです。まだ目的地までは遠いですね」

アランはエリルの指差した場所を見てため息をつく。

「まだまだ遠いじゃないか」

「それはそうです、少しペースが遅いですからね。もう少し早くしたいところですが」

「いや、のんびりする旅でもないけど、今は特に急ぐ用もないじゃないか。今のペースでいいと思うけど」

「それはどうでしょう。私達が旅をしている間にも、世の中は動いているんですよ」

「じゃあ、その動きをバーンズが調べてくるまで待とう」

アランは再びベッドに戻ってしまった。エリルはそれを起こすのをあきらめて、地図を見ながら旅程を考えることにした。

時間は経ち、夕食時になるとバーンズが帰ってきた。さすがにアランはもう起きていて、自分のナイフの手入れをしているところだった。エリルは立ち上がってバーンズを迎える。

「バーンズ様、情報はどうでしたか？」

「あまりいい状況ではなさそうだ。緩衝地帯では最近は魔物が増え

ているようで、往来にも支障がでているらしい」

「ということだそうですね、アラン様」

「つまり、急いだほうがいいってこと？」

バーンズとエリルはアランを見て、無言でうなずく。アランは首を横に振ってナイフを鞘に収めると、立ち上がって腰をのばした。

「とりあえず夕食にしようか」

「それなら私が下からもらってきます」

エリルは部屋を出て行き、バーンズはマントと背負っていた剣を外した。

「アラン様、旅程は決まりましたか」

「エリルが考えてたよ。そのことは食べてから相談しよう」

「わかりました。旅の疲れもあるでしょうから、休めるときに休んでおくのがいいでしょうね」

「さすが話がわかる」

と言ってる間にエリルがパンと茹でたソーセージや野菜の類をお盆に乗せて持って戻ってきた。それが手際よく机に並べられ、三人はとりあえず食事を始めた。

一番早く食べ終わったエリルは自分のスペースを片付けて早速地図を広げた。アランとバーンズも一時食事を中断して地図に注目した。

「これからの旅程ですが、バーンズ様のお話からすると急いだほうがよさそうなので、多少険しくとも時間を短縮できる道にすることにしました。町や村も少ないので食料はこの町で余分に調達したほうがいいでしょうね」

「つまり、こうやってまともなところで休めないってこと？」

「まったくないということではありませんよ。それに、この道のほうが日数はだいぶ短くなります」

エリルの言葉にバーンズはうなずき、アランに顔を向けた。

「エリルの言う通りです。ただ、一つ問題があるとすれば、その道は魔物の姿を見たという噂があるということですね」

アランはそれを聞くと、腕を組んで少しの間考え込むようにうつむいた。しばらくして顔を上げるとその顔にはあきらめの表情が浮かんでいた。

「道が険しいのは嫌だけど、魔物の噂っていうのは気になるし、早く目的地に着けるならその道で行こう」

## 道中のこと

一行が町を出発してエリルの考えたルートに入っていくと、段々と人氣がなくなっていくた。

「魔物が出るという噂はかなり信じられているようですね」

エリルが周囲を見回しながらつぶやく。道は狭く周囲は林で見通しは悪い。アランは荷台の上で寝転がっているだけで何の反応もない。馬車から降りて横を歩いていたバーンズはエリルと同じように周囲を見回しながら相槌をうつ。

「動物もあまりいないようだ。この様子では魔物が出るというのもただの噂ではなさそうだな」

「せっかくですから適度に姿を現してくれると腕ならしにちょうどいいのですが」

「それは勘弁してほしいな」

アランは寝転がったままつぶやくが、エリルは特に気にせず、自分の腰に差してある棒に軽く触れる。

「これを実戦で試しておきたいんです。アラン様も見たいと思わないんですか？」

「それより屋根のある場所で眠りたい」

「見たら驚きますよ。なにしろ最新の武器ですから」

アランはため息をついて姿勢を変えると、とりあえず目を閉じてみた。

さらに数日後、いよいよ道は荒れておかしな雰囲気が増してきていた。さすがにアランも寝転がるのはやめて、いざという時に多少は動きやすいように体を起こしている。バーンズはやはり馬車から降りて歩いている。

「なんか嫌な感じだな」

アランはつぶやいて右手でナイフを抜いた。エリルはそれに振り向く。

「何か感じるんですか？」

「それほど具体的なもんじゃないけど、まあなんとなく」

「なんとなくでも、アラン様の言うことなら気をつけておいたほうがよさそうですね」

エリルはそう言うつとバーンズの方に顔を向けた。

「バーンズ様、少し馬車を止めようと思うのですが」

「わかった。私は先を確認してこよう。ここは頼む」

バーンズはそう言うつと先に歩いていった。エリルは馬車を道端に寄せて止めると、御者台から飛び降りる。

「アラン様、馬を見ていてください。もし魔物が出てきても私が対応しますから」

「頼むよ」

アランはそう言うつて荷台から降りると馬の側に移動した。エリルはそれはわかっていているかのようにそれを確認もせず馬車から離れ、近くの茂みに近づいていく。しばらく立ち止まってそこをよく観察していたが、おもむろに茂みに向けて足を軽く振る。

その瞬間、振られた足の軌道から爆風が発生し、茂みを吹き飛ばした。だいぶ見通しはよくなったが特に何も見当たらない。しばらくそのあたりを見ていたがあきらめて、今度は道の反対側に向かう。そちら側でも同じようにして茂みを吹き飛ばすと、今度は何かが逃げるのが一瞬だけ見えた。だが、エリルはそれを気にせずに馬車のほうに戻る。

「とりあえずこの近くに魔物はいないようですので、バーンズ様が戻ってくるまで待ちましょうか」

「何も出ないほうがいいんだけど」

「そうですね？　ここで魔物を片付けておくのも悪くないと思いますよ」

「勇者の務めってやつ？」

「そうとも言えますね。やる気になりましたか？」

「倍増したよ」



二人はそれから馬車の側でバーンズが戻ってくるのを待つことにした。戻ってきたバーンズは剣を抜いて手に持っている。エリルはそれを見て眼鏡の位置を軽く直す。

「魔物が出たのですか？」

「おそらく新種の魔物らしい変わった小物が一体だけ出た。片付けできたのだが、まだ他にもいるだろうな」

「そうですか。どうします、アラン様？」

アランは頭をかいてからため息をついた。

「わかったよ。せっかくだから魔物の相手をしていこう。ひょっとしたら新種に遭遇できるかもしれないしね」

「そういうことですから、バーンズ様は馬車をお願いします。魔物は私とアラン様で探して片付けてきますから」

「わかった。アラン様を頼む」

バーンズはそれだけ言って馬車を守るような位置に立つ。アランはそれを見ると仕方なくという感じでエリルの後についてその場を離れた。

「で、魔物のいる場所に心当たりなんてあるの？」

「バーンズ様の行っていた方向に行けばいるんじゃないですか。死体があるなら、それに引き寄せられているかもしれません」

二人がある程度進むと、バーンズが倒したと思われる魔物の死体が転がっていた。それは小さな四足の魔物で、確かに変わった魔物だった。

「ピットデーモン、に似ていますが違いますね。確かに新種のようなです」

アランはその死体をチラッと見たが、すぐに顔を上げて林の方向を見た。

「何か来る」

エリルがそれに反応して顔を上げると同時に、木を薙ぎ倒しながら巨大な何かが飛び出し、二人に向かって突進してきた。二人は左右に別れてそれかわし、すぐに身構える。

その何かは人間の三倍はある巨体で、二本の角を生やし、巨大な牙とまるで石のような肌、所々錆びていたりするが、巨大で無骨な鎧のようなものを身につけていた。武器は持っていないが、巨大な手と鋭い爪は十分強力な武器と言える。全体的にオーガと呼ばれる魔物に似ているが、明らかに違うものだった。

アランはもう一本ナイフを抜こうとしたが、小さな火の玉が魔物の肩に直撃し、その注意がエリルの引き付けられた。

「アラン様、せっかくですからこれは私が相手をしますよ」

エリルは眼鏡を外すと、腰の棒に手を伸ばし、そのうちの一本を手にとった。だが、そこに魔物が一気に近づいて腕を振り下ろす。エリルはそれを軽くステップしてかわすと、手に持った棒を左の腰の棒に叩きつけ、つながった状態になったものを引っ張り出す。

次は魔物の腕が横に振るわれたが、エリルはそれに足をかけて飛び越えながら、左手でもう一本の棒を取り、右手の棒の先端に連結させた。

さらに逆方向から魔物の腕が襲いかかるが、今度は地面を転がってそれをかわすと、最後の一本を放り投げ、右手の棒を突き出して空中で繋げる。それからエリルは後ろに飛び退いてその棒を槍のようにつなげた。

「よく見てくださいよ、これが魔法槍です！」

その言葉と同時に、棒の先端から炎が噴き出し、それが槍の先端の形状になった。エリルは踏み込むとそれで魔物の胴を薙ぎ払う。炎の穂先は鎧の内側に入り込み、魔物の体を直接焼いた。体を焼かれた苦しみで魔物は数歩後ずさった。

エリルは手を休めずに連続で突きや払いを繰り返して、魔物をどんどん追い詰める。魔物は苦し紛れにがむしゃらに腕を振り回すが、エリルはそれを簡単にかわして距離をとった。

それから槍を構えると一度炎を消し、静かに力を集中させた。その手からわずかな放電が起り始め、槍の先端に集中していく。そこに魔物が恐ろしい勢いで突進してくる。エリルはそれをしっ

かり引き付けると、足を踏み出し、その瞬間に槍の先端から凄まじい閃光が走った。

アランは思わず一瞬目をつぶった。そして再び目を開けたときには、口から煙を吐き、胴体に穴を開けた黒焦げの魔物が倒れていくところが見えた。エリルはそれを確認すると、アランのほうに戻って来ながら、槍を元のばらばらの棒にして腰に戻した。ついでに眼鏡もかけなおす。

「どうでしたか？」

「すごい威力だったよ。でもあそこまでやらないで、原形を残しておいて詳しく調べたほうがよかったような」

「新種の存在が確認できたんですから上出来じゃありませんか。この調子ならまた遭遇できそうですし、それはその時にやりましょう」

## 村の魔物

それから数日後、一行はさびれた村に到着していた。とりあえずバーンズが交渉し、一軒の家を借り、そこで休んでいた。

夕方になると、村の者が二名、食事を持って訪ねてきた。食事を置くと、年配の女のほうが口を開いた。

「旅のお方達はどうやってこの村まで？」

「最近魔物が出るという噂の道を通ってきました」

エリルの答えに村人二人の表情が変わった。

「では、道中で魔物には？」

「少し遭遇して片付けてきましたが、それが何か？」

女はそれを聞いて身を乗り出し、勢いよくエリルの手を握った。

「どうか、どうかこの村を魔物から救ってください！」

エリルはそれにたいして軽い身のこなしで手を引くと、アランのほうに振り返った。

「どういたしますか？」

「いいんじゃないかな。ここらで何日か留まるのも悪くなさそうだし」

アランはバーンズのほうに顔を向けて同意を求める。

「人々の窮状を見逃すわけにもいかないでしょうね」

エリルはうなずいて、女のほうに向き直った。

「わかりました、お力になりましたよう」

その言葉に村人二人は三人に向かって頭を下げた。

「では、詳しいことはまた明日、ご相談に上がさせていただきます」  
村人は家から出て行き、三人は食事を始めた。やはりエリルが一番最初に食べ終わり、口を開いた。

「アラン様、何か計画はあるんですか？」

「別に、特に何も考えてないけど。まあまずはこの村のことをちゃんと知らない駄目か」

「早速今晚見てきます」

「いや、もつとゆつくりでいいんじゃないの？」

「ここが目的地ではないんですから、そうゆつくりもしていられませんよ。今晚は私が一人でやりますから、とりあえずゆつくりしておいてください」

「で、明日は働けつていうんだろ。まあいいよ、それで」

「それでは、バーンズ様は村のほうをお願いします。私は昼間は休めますから」

「わかった。アラン様、村の守りは私が引き受けますので魔物探しはお任せします」

「じゃあ、さつさと休もう」

それだけ言うとアランはさつさとベッドに横になった。エリルはバーンズに向かってうなずくと、静かに外に出て行った。

「ところでさ」

しばらくしてからアランは寝転がったまま口を開く。

「エリルのあの武器はどういうものか、知ってるのかい」

「本人から聞いていないのですか？」

「聞く機会もないし、教えてもくれないんだよ」

「そうですね。私もそれほど詳しくは知らないんですが、あれを使うには魔力の精密なコントロールが必要だということです。私では連結させることもできません」

「まさかエリルくらいにしか使えないとか？」

「あそこまで使えるのは彼女くらいのものでしょうか。間違いなく天才でしょうから」

「天才ね」

アランはつぶやいてから目を閉じた。

翌朝、アランが目を覚ますとエリルが戻ってきていた。

「おはようございます。ずいぶんゆつくりとお休みだったようですね」

「ああ、おはよう」

アランが起き上がってテーブルにつくと、そこには一枚のパンと手描きの地図が置かれていた。

「少々雑ですが、この村と周辺の見取り図です」

「ありがとう。結構詳細じゃないか」

「ええ、ですから早く済ませて出発しましょう」

「わかったよ。これ食べたらずぐに出るから」

アランはパンを飲み込むと、身支度を整えてドアに手をかける。

「じゃあ、行ってくる」

「はい、アラン様。くれぐれもお気をつけて、あらゆるものに注意をしておいてください」

エリルから昼食を受け取って外に出ると、そこにはバーンズが立っていた。

「アラン様、もうお出かけですか」

「すぐに片付けて戻ってくるよ」

「無理をせずにお早めにお帰りください」

「そうする」

アランは軽い調子で村から出て行く方向に向かった。村の周囲は畑が広がっているが、あまり大きなサイズではなく、すぐに山に入ってしまう。だが、アランは迷うことなくそこに入っていく。ナイフを右手に持つと、枝や藪を切り払いながら進んでいった。

そうしてしばらく進むとエリルの見取り図通りに、小さく開けた空間に出た。アランはナイフを鞘に収めてから大体その中心に腰を下ろす。それから意識を何かに集中させるように目を閉じた。

「大地の精霊よ」

小さくつぶやくと、アランは自分の感覚が大地とつながり、大きく拡張されていくのを感じた。そのまま意識を集中し、魔物の気配を慎重に探る。

数分後、アランは目を開けて立ち上がると、再びナイフを抜いて森の中に入っていく。そしてあるところまで来ると、おもむろに木

に登り始めた。

高い場所から下を見下ろすと、少し離れた場所に四足で動く魔物らしき影が見えた。アランはナイフを構えてタイミングをうかがう。そして、影が木の近くに近づくと、アランはナイフを振りかざして飛び降り、その勢いのまま魔物の背中に膝を落とすと同時に首筋にナイフを突き立てた。魔物は痙攣したあと、すぐに動かなくなつた。

アランはナイフを抜き取ると、魔物の死骸をよく観察する。バーンズが斬つた魔物と似ているが微妙に違い、既存の魔物とも違った。そこにもう一体、似たような姿の魔物が後ろから飛びかかってきた。だが、アランは左手のガントレットでその頭をつかむと、強烈な雷で魔物を痺れさせ、ナイフで首を切り裂いた。

「これであと二体かな」

アランはナイフを振って血を払うとすぐにその場を離れた。

一方その頃、残っていたバーンズは村の中を見回っていた。村はさびれていたが、アラン一行が訪れたせいか、バーンズに近づいてくる子供もいたりで、明るい雰囲気も見えてきていた。

「旅のお方」

村の外れまで来たとき、一人の老婆がバーンズに声をかけてきた。バーンズが立ち止まると、老婆は周囲を見回して人がいないのを確認すると、その腕をつかんで家の影に引っ張った。バーンズはされるがままにしてそれについていった。

「何かご用ですか？」

「気をつけなされ、あなた達は使い捨てられますぞ」

それを聞いてバーンズは笑った。

「こういう小さな村にも色々あるのでしょうか、なにも心配することはありませんよ。我々、いや、あの方はそんなものは気にせずになんとかしてしまうでしょうから」

それだけ言うとバーンズは老婆の肩に手を置いて、その場を立ち去った。それから滞在している家に戻ると、エリルが休みもせず

食事の準備をしていた。

「休まなくていいのか？」

バーンズが聞くと、エリルは眼鏡の位置を直した。

「アラン様はすぐに魔物を片付けるでしょうから、出発前に豪華な食事でも用意しようと思ひまして」

「そうか。なにやら妙な話も聞いたが、問題はないだろうな」

「ええ、アラン様はそんなに気がきく方でもありませんし、この村の者が何を考えていたとしても関係はないでしょうね」

二人とも不穏な部分のある話の内容にしては気楽な様子で、アランを信じているようだった。



## 元王子の力

アラン茂みの中に隠れて二体の魔物の様子を見ていた。一体は先に片付けた二体と似たような小型の四足の魔物で、もう一体はエリルが倒したのと似ているが、巨大な斧を持っている物騒な奴だった。「水の精霊よ」

そうつぶやいてからアランは茂みから出ると、その二体の正面に自分の姿をさらした。魔物達はすぐにそれに気がつき向きを変える。それに向かつてナイフが振られると、水でできた刃が勢いよく飛んだ。それは四足の魔物を鮮やかに切り裂く。

それからアランは前方に走りながら、左のナイフも抜く。魔物はそれに向かつて走りながら斧を振り回してきた。アランはそれを軽い身のこなしでかわすと、ナイフで魔物の足を切りつける。

だが、それは浅く、魔物に決定的なダメージは与えられない。アランは勢いのまま魔物の後ろにまわると、止まってからナイフを構えた。魔物も巨体に似合わぬ素早さで振り返ると、斧を振りかざして突進する。

振り下ろされた斧をアランは横に移動してかわし、さらに間髪入れずに横薙ぎにされた斧は転がってかわした。

アランは膝をついた体勢から地面を蹴ると同時に左手のナイフを空中に投げ、そのまま魔物の顔面に左手を突きつける。爆発が魔物の頭に直撃し、その巨体がぐらついた。アランは落ちてきたナイフをつかむと、魔物の足を二本のナイフで深く切る。

深手を負った魔物はその場で膝を地面につく、アランはその膝を踏み台にして飛び上がると、一瞬でナイフを逆手に持ち替え、魔物の首に突き立てた。

魔物は斧を落とし、もがきながら後ろ向きに倒れる。アランがナイフを握る手に力を込め、さらに深く挟ると、魔物はしばらくして動かなくなった。アランはナイフを抜いて血を払ってから鞘に収め、

その場を立ち去った。

その頃、料理を済ませたエリルはバーンズに留守番を任せ、出歩いていた。別に村の人間が何を考えていようとどうでもいいことだったが、せっかくだからその事情でも調べてみようと考えた。

昨晚村を調べて気になっていた集会所のような大きな建物の近くにまで来てみると、昼間だというのに完全に閉め切られ、表の入口には一人の見張りらしき者が立っている。

エリルは誰にも見つからないようにその裏にまわると、見張りに立っている村人に音もなく近づいて、自分の姿が見られるよりも早く一撃を加えて意識を刈り取った。

見張りの体を隠してから、エリルは鍵の内部を小さく爆破してドアを開けた。中は薄暗く動いている人影もなく、空気が淀んでいて妙な熱気がこもっている。

薄暗い室内に目が慣れてくると、藁が敷かれただけの床に何人もの様々な年齢の人間が寝かされているのが見えた。エリルはその光景で自分の想像が正しかったのを知った。

「やはり疫病ですか」

そうつぶやいてから、エリルは小さな火の玉を出して空中で固定すると、その明かりで室内を調べだした。まずは病人のことをよく観察してみると、全員高熱で意識が朦朧としているようで、見覚えがないはずのエリルを見ても特に変わった反応はない。

エリルにはその疫病の診断はできなかったが、深刻な状況であるのはわかった。それから入口近くの机に向かうと、その中を静かに漁り始める。そして一枚の紙を見つけると、それに目を通してからベルトに挟んだ。それから手を軽く振って火の玉を消すと、入ってきた裏口から静かに外に出て行った。

「なるほどな」

バーンズはエリルが持ち帰ってきた紙を見て自分のあごをなでた。「疫病に魔物の二重苦で、訪れた旅人にたいして追いはぎのような

ことをしていたようですね」

「我々にもそうするつもりだったのだろうな。魔物を退治すればそれでよし、駄目でも荷物は自分達のものにできる。それにしても、なぜ中央に助けを求めなかったのだろうな」

「恐らく疫病で村が隔離されることを恐れたのではないでしょうか。もつとも、魔物のおかげでその努力も無駄になったようですが」

「そうだな。それに、もうアラン様がお帰りになる頃だろう」

そこでタイミングよくドアが開けられ、アランが入ってきた。

「ただいま」

「お帰りなさいませ」

エリルはすぐに立ち上がり、アランにタオルを手渡した。アランはそれを受け取り顔を拭くと、すぐにベッドに腰かけた。

「魔物は四体、全部片付けてきたよ」

「さすがです。ところで、もう一仕事あるのですが」

「もう一仕事？」

「はい。この村には疫病が流行っているようなのですが、アラン様の力ならばその苦しみを少しでも和らげることもできると思うのですが」

「疫病か。それならすぐに行こう。場所は？」

「ご案内します。バーンス様も一緒に」

三人は連れ立って、さっきエリルが侵入した建物の前に来ていた。そこには村人が何人か集まっていて、物々しい雰囲気になっている。エリルは何も知らないような態度でしてそこに近づいていった。

「どうかしましたか？」

エリルが聞くと、昨日食事を持ってきた女が一步前に出た。

「いえ、お客様方には関係のないことです」

「そうでしょうか？ 疫病、だったら私達にも関係がないとは言えないと思いますよ。そこを通してもらいましょう」

エリルは目を細めてから足を踏み出した。女は行く手を遮るようにその場から動かない。

「手荒なことはしたくないので、どいてもらえますか」

冷たい声がエリルの口から発せられ、眼鏡の奥の目も、その声と同じように一瞬冷たい光を放った。女はそれを見ると一瞬硬直してから、よろめくようにしてその場からどいた。

エリルが足を進めると他の村人達も同じように道を開け、三人は建物の前にたどり着いた。まずはエリルが火の玉を出して中に入り、アランとバーンズもそれに続く。

エリルの灯した火でアランは室内を見回す。それから寝かされている疫病患者に近寄ると、しゃがんでその額に手を当てた。その体勢のままアランは目を閉じて、しばらくその体勢を維持してから、ゆっくりと目を開いた。

「これは簡単に治るものじゃなさそうだ。とりあえず体力が持つようにしておくようにして、回復するまで体が耐えられるようにしておくしかない。早速取りかかるよ」

そう言うつとアランはその場に座り、全身の力を抜いた。すると、その背後に薄い水の影のようなものが現れ、それが広がると寝ている患者達を包んでいった。

「水の精霊よ、癒しの力を」

小さくつぶやくと水の影が淡い光を発した。室内に入ってきていた女はそれを見て驚きのあまり固まる。

「すぐには治りませんが、これでこの方達は大丈夫ですよ」

エリルの言葉に女は顔を動かし、その顔を見た。それにたいしてエリルは笑顔を見せると、口を開く。

「では、私達は別の問題について話し合いましょうか。バーンズ様はアラン様をお願いします」

「わかった。任せる」

バーンズはそれだけ言うと、アランの近くに移動し、守るように立った。

## 旅の剣士

数日後、アラン一行は村を出発していた。

「シェーラが護衛をつけてたとはね。全然気がつかかったよ」

アランがそう言うのと、エリルが馬を操りながら答える。

「それはシェーラ様の性格を考えればわかることだと思いますが。あの方がアラン様を放っておくわけがないですよ」

「まあ、そのおかげであの村のことを任せて、すぐに出発することができたんだから、よかったけどね」

エリルはそれを聞いてため息をついた。

「できの悪い兄を持つと苦勞するんですね」

「まあ、できのいい妹はありがたいよ。おかげで家のことは気にしなくて済むしさ」

「アラン様が旅に出された理由がよくわかります」

二人がおしゃべりをしていると、先に進んでいたバーンズが戻ってきた。

「アラン様、この先に魔物を確認しました。馬車はここに置いて、先に片付けるべきだと思います」

「そういうことなら、エリル、ちょっと留守番を頼むよ」

「わかりました。お二人ともお気をつけて」

アランとバーンズはエリルに見送られてその場から移動する。そして少し先に進むと、バーンズは道から外れて少し歩くと、足を止めた。

「何か聞こえますね」

バーンズの一言にアランはうなずいた。

「誰かが戦ってる音だ」

二人が黙って慎重に進んでいくと、前方で誰かが魔物と戦っていた。それは剣と盾を持った男、剣士のようで、小型の魔物に跳びかかられながらも、それを盾で防ぎ剣で払い、一步も引かずに戦って

いた。

「あれはまずいですね。腕は立つようですが、これ以上魔物が増えたら押し切られる。私が飛び込みます、アラン様は援護をお願いします」

バーンズは返事を聞かずに走りながら剣を抜き放った。それから剣の根元のスロットを動かすと、そこに一枚のカードを入れ、スロットを元の位置に戻した。

そして剣士の後方に走りこむと飛びかかってきた魔物に向けて剣を振った。斬られると同時に魔物は爆発して跡形もなくなる。そのままバーンズは剣士の背後を守る位置に立った。剣士は構えをとわずにわずかに振り返る。

「あなたは？」

「今は自分の身を守ることに集中するんだ」

二人は背中合わせで立ち、それぞれ武器を構える。その体勢で飛びかかってくる魔物を切り払い、順調にその数を減らしていく。

だが、突然剣士の前に影が現れ、その盾を体ごと弾き飛ばした。

自分の横を転がる剣士にバーンズが振り返ると、そこには人間の形をした黒いものがいた。

「魔物か」

バーンズはつぶやくと、剣のスロットを動かしてカードを入れ替え、その黒い魔物と対峙した。両者は数秒動かなかったが、まずは魔物が動いた。

その動きは俊敏であつという間に間合いを詰めてきたが、バーンズはわずかな動作でそれをかわして、すぐに体勢を整える。魔物はまた間髪いれずに襲いかかるが、バーンズはそれに前蹴りをくらわして隙を作ると、剣を振り上げてそれに向かって踏み込む。

「メテオスマッシャー！」

剣が凄まじい勢いで振り下ろされ、地面に窪みを作りながら魔物を一瞬で叩き潰した。バーンズがゆっくりと剣を持ち上げると、そこには魔物の欠片のような原形質の物質だけが蠢いていた。それは

しばらくすると蠢きながら蒸発するように消えた。

そこにナイフを収めながらアランが近づく。

「今までも変わった魔物はいたけど、これは完璧な新種だね」

「そうですね。侮れない強さです」

バーンズは剣からカードを抜きとり、鞘に収めてから倒れている剣士のほうに近づいて手を差し伸べると、剣士はそれをつかんで立ち上がる。それから剣士は剣を鞘に収め、盾を背負った。

「助力を感謝します」

「体は大丈夫か？」

「大丈夫です。それより、あなた達は一体？ さぞや名のある方々とお見受けしましたが。いや、申し遅れましたが私の名はレンハルト、修行の旅をしています」

「私はバーンズ、旅の者だ」

「僕はアランだ、一緒に旅をしてる。仲間はまだ一人いるから、せっかくだから紹介していいこうか」

そう言うアランは背を向けて歩き出した。レンハルトは一瞬躊躇したが、バーンズが歩き出したのを見て、その後に続くことにした。

しばらく歩くと、三人は荷馬車で待っているエリルのところに到着した。エリルはレンハルトの姿を見ると、眉だけ動かして見せ、アランに小声で話しかける。

「お客様ですか？」

「そうだよ、向こうで魔物と戦ってたんだ。修行中らしい」

「それは面白そうですね」

エリルはそれからレンハルトのほうを向いて軽く頭を下げた。

「初めまして、私はエリルといいます。お名前を伺えますか？」

「レンハルトです。よろしくお願いします」

それからエリルはアランとバーンズに顔を向けた。

「アラン様、バーンズ様、魔物がいなくなったのなら出発したいと思うのですが、そちらのレンハルトさんも一緒にするのですか？」

アランとバーンズは顔を見合わせてから、バーンズがレンハルトのほうを向く。

「レンハルト殿、我々はブレイトンロック共和国との緩衝地帯に向かっているのだが、貴殿の目的地は？」

「いえ、私はあてもない旅です。しかし、もし一緒にできるのなら、是非お願いしたいのですが」

レンハルトはそう言って三人に頭を下げた。バーンズはアランに顔を向け、エリルも同じようにした。アレンはそれにしばらく考えるような仕草をして、口を開く。

「わかったよ、そういうことなら一緒に行こう。よろしく、レンハルト」

「よろしく願います、皆さん」

そういうわけで、アラン一行は四人になることになった。

「ところでレンハルト、君の荷物は？」

「この先に置いてきてます」

「それなら、まずはその回収からだね。エリル、出発だ」

「はい、了解しました」

アランが荷台に乗り、エリルは御者台に登った。バーンズとレンハルトは荷馬車の隣に並び、歩き始めた。

「バーンズ殿、言いたくないのかもしれませんが、やはりあなた達がただの旅人とは思えません」

「確かに我々はただの旅人とは言えないが、今はまだ、ただの旅人だ。だが、アラン様はただの旅人では終わらないだろうが」

「アラン殿は、あなた達の主なのでしょうか？」

「形としてはそうだが、アラン様はそんなことは気にしていない。ところで、レンハルト殿は修行の旅ということがだが、どのくらい旅をされているのかな」

「旅に出て四年になります。昔はある国で兵士をしていたのですが、それに限界を感じたので」

「そうか。ずっと一人旅だったのか？」



「おおむねそうでした。ところで、バーンズ殿はあの、ノードルシア王国の王の騎士と言われるバーンズ殿なのですか？」

それを聞いてバーンズは軽く笑った。

「私も意外と有名なのだな。しかし、それならアラン様のことも知っているのではないか？」

「バーンズ殿が本物であるなら、そういうことなのですね？」

「それは言いふらすことでもない。我々と一緒に旅をするなら、あまり声高に言ってもわかってもらっては困るな」

「もちろん、それはわかっています。ただ、私の修行に付き合って頂きたい」

## 緩衝地帯の町、アカーナ

レンハルトを加えたアラン一行四人は、ノードルシア王国とブレイテンロツク共和国の緩衝地帯にある町、アカーナに到着していた。その町はそれなりに大きな町で、国境の間にあるということと、二国の友好的な関係を反映しているせいか、かなり高度な自治が行われていて、様々な人や物が集まる特殊な場所だった。

「私は宿を探して来ますから、みなさんはてきとうに町を見てきてください。私はまた昼頃にここに帰ってきますから」

厩舎に馬車を預けてから、そう言ったエリルは一人で先に歩いていってしまった。残された三人はそれを見送ってからとりあえず歩き出した。

「二人とも、これからどうするんだい」

アランが聞くと、まずはバーンズが口を開く。

「私は町の周囲を見てきます。レンハルト、お前は どうする？」

「装備の整備に行つてきます。魔物との戦いで少々傷んでいるので」

「そういうことなら、僕も一緒に行こうかな。ナイフの手入れをしておきたいし、行こうかレンハルト」

「わかりました。ご一緒しましょう、アラン殿」

アランとレンハルトは町の中に、バーンズは外に向かった。

「ああ、ここかな」

鍛冶屋はすぐに見つかり、外で剣を研いでいる中年の男にアランが近づいていく。

「武器の手入れを頼みたいんだけど」

男はその声に反応して、手を止めて顔を上げた。

「いらつしゃい。ものはなんですか？」

アランは自分のナイフを抜くと、それを男に差し出す。男はそれを受け取ると、刃を慎重に調べてから口を開いた。

「これならうちでやることはほとんどありませんな。よく手入れし

てある」

「それならすぐに終わるのかな。手っ取り早く頼むよ」

「はいよ。そっちのお連れさんはなんですか？」

「これを頼みます」

レンハルトは自分の剣と盾を差し出した。男はそれを調べると軽くため息をついた。

「こりやけっこう傷んでますな。今日はうちで預からせてもらって明日取りに来てもらえますか。変わりは奥で見てください」

そう言つて男は店の中に入っていくと、アランとレンハルトもそれに続いた。店内はよく整理されていて、売り物の武具などが並べられていた。

男は預かった武具を奥に置いてから、レンハルトの剣と盾に似たものを持ってきた。

「とりあえずこれをどうぞ。ナイフのほうはすぐに終わるんで、ちよつと待つててください」

「よろしく」

アランはてきとうな場所に座った。レンハルトは借りた剣と盾を身に着けると、アランに軽く頭を下げる。

「私は少し町を見てくるので、また昼に会いましょう」

「ああ、これからのこともあるし、あとでゆつくり相談しようか」  
レンハルトは店を出て行き、それを見送ったアランは座ったまま自分のナイフが仕上がるのを待った。しばらくして、ナイフを受け取ったアランは鍛冶屋を出た。それからアランは気の向くまま町を散策しだす。

町の賑わいはノーデルシア王国の首都の光景に馴染んでいるアランから見ても中々侮れないものだった。アランはなんとなく見かけた質屋に入ることにする。

店内は日中だが薄暗く、少しほこりっぽかったが、商品は日用品から武器防具、家具やアクセサリ類、衣類等の様々なものが並べられていた。

「いらつしゃい、何かお探し？」

店番をしていた中年の女が声をかけてきた。

「いや、この町には今日着いたから、色々見てまわってるんだ。これだけの町なら、こういう店には何か面白いものでもあるんじゃないかと思ってるね」

「それならそつちのほうにあるから、好きに見てって」

アランは女が指差したほうに目を向けた。そこは様々なアミュレットや指輪などのアクセサリー類が並んでいる。

「なるほどね。色々いわくつきのものもありそうだけど、掘り出し物もありそうだ」

「一目でわかるとは、中々お目が高いね。うちは質屋だから、まあ色んなものがあるよ」

それからアランはすでに身につけているアミュレットは除外して、指輪を中心に一つ一つ手にとって調べていった。

ただの指輪がほとんどだったが、中には呪いや魔力が感じられるものもあった。アランは呪いが感じられるものは手にとった時に水の精霊の力で浄化していく。

そして、アランは一つの何の変哲もない銀の指輪を手にとった。それをしばらく手の上でこねくりまわしてから、指にはめてみた。しかし指輪はサイズが大きく、うまく指にはまらない。アランはそれをもう一度手の上に戻した。

「これはいくらだい？」

「ああ、それね。置いといたところに値段が書いてあるよ」

言われた通りに指輪が置いてあった場所の下に値段が書かれていた。見た目よりはいい値段がついていたが、アランは迷わずその料金を出した。

とりあえずそれだけ持ってそこを出ると、アランはすぐにさっきの鍛冶屋に向かう。そのまま店内に入ると、さっきの男がすぐに出てきた。

「おや、また何か用ですか？」

「このサイズを変えてもらうことはできるかな」

アランが買ったばかりの指輪を出すと、男は首を横に振った。

「そういう細かいものはうちじゃ扱いませんね。この通りの外れに細工師がいますから、そっちに持っていくといいですよ」

「そうか、ありがとう」

指輪をしまったアランは外に出ると、通りの外れに向かい、こじんまりとした店に入った。店内にはアクセサリーから時計などの小物まで様々なものが所狭しと並べられている。

「いらっしやいませ」

店主らしき若い、眼鏡をかけた上品な雰囲気の男がアランを迎えた。アランは早速指輪を取り出す。

「この指輪のサイズを変えてもらえるかな」

男は指輪を受け取ってそれをよく確認してからうなずいた。

「わかりました。ではとりあえずこちらで預かっておきますので、また明日、来て頂けますか？」

「ああ、少し店内を見せてもらうよ」

「どうぞ、ご自由にご覧になってみてください」

アランは遠慮なく店内を見始めた。展示されている商品はどれもよくできていて、王宮の生活に慣れているアランの目から見ても上質なものが多かった。さんざん冷やかしてから、アランは料金を前払いして店を出た。

それから数時間後、アランは待ち合わせの場所に向かった。そこにはすでにバーンスが先に来ていてアランを迎えた。

「アラン様、町はどうでしたか」

「中々いい町だと思うよ。ちょっと店を見てきたけど、どこもしつかりしてたし。そっちは？」

「この町の自警団が機能しているようで、町の周囲に魔物の気配はありませんでした。それに、主要な道も安全は確保されているようです」

「なるほどね」

そこでレンハルトが向かってくるのが見えた。

「すみません、遅くなりました」

「いや、別に遅くはないと思うよ。それよりエリルはまだかな」  
「来ましたよ」

言ってるそばから、いつの間にかアランの背後に立っていたエリルがいた。アランは頭をかいてから振り返る。

「宿は決まったのかい」

「はい、レンハルトさんも一緒にしておきました。それでいいですね」

エリルの問いにレンハルトはうなずいた。

「そうして頂けると私も助かります」

「では、一旦宿に行きましょうか」

「やっと思えるよ」

アランは背中を伸ばしながら、先に歩き出したエリルの後につづいた。

## 自警団

宿ではアランとエリル、バーズとレンハルトの二組にわかれて部屋をとっていた。自分達の部屋に入ったアランは早速ベッドに横になる。

「あーあ、これからどうしようか」

「まだ昼ですから、起きて行動するのが一番ですよ」

「行動って、具体的にはなにをするつもりだい」

「とりあえずこの町の自警団と接触するのがいいですね。魔物の情報があるのはそこでしょうし、魔物を相手にするなら一応話を通しておいたほうがいいでしょう」

「協力でもとりつけるの？」

「いいえ、黙って見ていてくれるようにするだけです。変な横槍が入ると面倒くさいですからね」

「なるほどね、じゃあそれは」

「とりあえず私が行ってきます」

「そういうことならよろしく。僕はここで待つてるよ」

そう言っアランはもつとリラックスした体勢になった。エリルはため息をついて眼鏡の位置を直した。

「いいえ、アラン様はこの町のことをよく知っておいてください。しばらくここに滞在することになるんですからね。それと、できれば住人に名前でも売っておいてください、評判がよければ色々便利です」

「評判をよくするって、一体何をすれば？」

「思うように行動すればいいんですよ。アラン様なら大丈夫です。すぐに始めてください」

今度はアランがため息をついて起き上がった。

「わかったよ。夕方まで町を散歩してくる」

部屋を出たアランは、隣の部屋をノックしてドアを開ける。中で

はバーンズとレンハルトがテーブルについて何かを話していた。アランが入ってきたのを確認するとバーンズは立ち上がったてそれを迎えた。

「これから町を夕方までぶらつくんだけど、どっちか付き合つかい？」

「そういうことでしたら、私はまた外を見えますので、レンハルトと一緒に行ってはどうでしょう」

「さっきはすぐに別れちゃったし、そうしうか」

「わかりました、アラン殿」

レンハルトは剣と盾を身につけた。二人はバーンズに見送られて部屋を出ると、そのまま宿を出て町に繰り出していった。

それを見送ったエリルは素早く身支度を整え、自分も宿から出た。向かう先はこの町の自警団の本部。ほぼ町の中心に位置している大きな建物は、まさにこの町の象徴と言えるような雰囲気で、住人からすれば頼りがいのあるものに見えるはずのものだった。

エリルはその建物をじっくり見張れる位置を確保すると、できるだけ目立たないようにして監視を開始した。

しばらくそうしていると、巡回が戻ってきて、新しい巡回の者達が発見した。エリルはその後を距離をとってつけ始める。

巡回は町の中を決められた順路でまわっていて、特に事件も何も起こらない。エリルはそれでも飽きずに根気よく巡回の後をつける。その間に巡回の一挙手一投足から、住人の反応まであますことなく観察した。

巡回は真面目に行われていて、住民達の反応も悪くない。あてにされている様子からは、自警団は統率がとれていて、実力もあるのが見てとれた。だが、どこからか厳しい視線が注がれているような気もした。

とりあえずそれは頭に入れておくに止め、エリルは自警団の本部に足を向ける。そして建物の中に入り、手近な団員をつかまえた。「責任者と会いたいのですが」



「責任者って、あんたは？」

「旅の者ですが、道中で魔物と遭遇したので、そのことを報告しようと思ひまして」

「魔物？ それならちよつと待つてくれ」

団員はエリルをその場に残して奥のほうに行つた。しばらくして戻つてくると、無言でエリルに手招きをする。エリルはそれについていき、こじんまりとした二階の部屋に通された。

そこには机について仕事をしている、一人の中年の男の姿があつた。男は顔を上げただけでエリルを迎えた。

「私がここの責任者のエクサだ。魔物と遭遇したということだが、詳しい話を聞かせてもらいたい」

エリルはまず椅子に座つてから、十分に間を取つて口を開く。

「初めまして、私はエリルといいます。単刀直入に言いますと、私達は四人で旅をしているのですが、諸事情で魔物が出ると噂の道を通つて来て、立ち寄つた村で魔物と遭遇しました」

「魔物が出る道か、ずいぶん無茶をしたようだな。それで、無事ということは片付けてきた、ということでもいいのか？」

「ええ、村付近の魔物と、道の付近の魔物、両方を片付けてきました」

「それはありがたい。そういうことなら、すぐに人をやつて確認させよう。そちらのうちの誰かにも同行してもらいたいのだが、どうだ？」

「もちろんいいですよ、明日にでも出発しましょうか？」

「いや、こちらにも準備がある。三日後に出発ということでしょうか？」

「いいですよ、では三日後に。ああ、それから私達の宿の場所も教えておきましょう」

エリルはエクサに宿を教えるから立ち上がった。

「では、今日はこれで失礼します」

そう言つてエリルが部屋から出て行くと、エクサは立ち上がつて

人を呼んだ。そうするとエリルと似たような年齢の短髪の女が部屋に入ってきた。

「レノール、調べておいてもらいことがある」

「今度はなんですか？」

レノールと呼ばれた女は面倒くさそうな表情で投げやりな返事をした。

「あの魔物が出るという噂があつた道を通ってきたという者がここに来ていた。魔物を片付けたということは三日後に確認するが、その一行というのは気になる」

「だからそいつらを調べろ、ってことですか」

「そうだ。怪しい者ではないかどうか、すぐに調べてくるんだ」

「了解。でも、さっきの女ならそこですれ違いましたけど、あれはなんかやばそうですよ。まあ、なんとなくってという勘ですけど」

「お前の勘なら当るかもしれないな、慎重にいけ。宿はここだ」

「はいはい。できとうにやってきます」

レノールはエクサの差し出した紙を受け取ると頭をかきながら部屋を出た。そのまま自警団の本部を出ると、まっすぐにアラン達が滞在している宿に向かう。

そして、レノールは宿にそのまま入っていき、アランの部屋に向かった。部屋をノックしてみたが当然反応はなく、隣の部屋もノックしたが、それも反応がない。レノールは軽く首をかしげてから、その場を立ち去って外に出た。

「まあ、夜ならいるはずか。品定めはそれからでも遅かない」

そうつぶやいてからレノールは町の中に姿を消した。そして、それを物陰から見ていたエリルは珍しいものを見るような表情でそれを見送った。

## 協力者

その日の夜、アラン一行は宿の食堂に集まっていた。なぜか五人分の食事を前に、まずはエリルが口を開いた。

「さて、これから来客があると思うのですが、特に緊張する必要はないと思いますから、楽にしていってください」

「来客？ 誰かこの町に知り合いでもいるのかい？」

アランが不思議そうな顔でたずねると、エリルは首を横に振った。「いいえ、違いますよ。誰の知り合いでもありません。まあ私達に非常に興味を持っている人物ですね」

アランは黙ったまま、なんとなく宿の出入り口を見た。

それから少し経って、ドアが開きレノールが入ってきた。入口から数歩のところで立ち止まると食堂内を見回し、アラン達を見ると真つすぐ向かってくる。それに反応してエリルが立ち上がり、レノールをじつと見る。

「初めまして」

まずはエリルが口を開いた。レノールは少し間をおいてから首だけ曲げるような礼をする。

「こちらこそ。あたしはレノールっていうんだけど、あんた達に興味があつてね」

「興味ですか、それならこちらにもありますよ。とりあえず座つたらどうです？」

「待つてくれたわけか。じゃあ遠慮なく」

レノールは椅子に座ると、その場の全員の顔を見回した。

「なるほど、これは頼もしそうな雰囲気つてやつか」

そしてレノールはアランの目をじつと見る。

「見たところ、リーダーはそちらさん？」

「まあ、一応そうだよ。僕はアランだ、よろしく。で、そつちがバインズとレンハルト」

アランが残りの二人を紹介してから手を差し出すと、レノールはそれを軽く握り返した。

「どうぞよろしく。で、単刀直入に聞きますが、あんたがたは何者ですか？」

そのレノールの問いに、アランとエリルは顔を見合わせた。それからエリルが口を開く。

「私達はただの旅人ですよ。魔物を倒しながら旅をしているだけです」

「じゃあそのためにわざわざ危険な道を通ってここまで到着したと、物好きなことで。ただの旅人がそんなことをしたりはしないと思うけどもね」

「それなら、私たちはただの旅人じゃないんでしょうね。それで、そろそろあなたが持っている興味というのを教えてもらえますか？」

いや、その前にあなたの本来の仕事はいいんですか？」

「なんだ、わかってたわけか」

レノールはため息をついて首を横に振った。

「ま、ばれてるなら言うておくけど、あたしは自警団の所属でね。でもまあ、それより重要なことというか、本来の目的のためには勝手にやらなきゃいけないこともあんの」

「本来の目的っていうのは、いったいなにかな」

アランがそう言うと、レノールは薄く笑ってみせた。

「自警団なんだから、その名の通りのことですよ」

その答えを聞いたアランは少しの間レノールをじっと見てから、うなずく。

「わかった、そういうことならちゃんと話し合おうか。まずは夕食を済ませてからね」

アランの言葉を合図に食事が始まった。レノールはリラックスした様子でその場の全員を見ながら、料理をてきとうに口に放り込んでいた。

レノールの見たところ、一見アランはたんなるいいところのぼっ

ちゃんという感じがするが、他の三人から敬意を持たれているのはすぐにわかった。実力は未知数だが、二本の大振りなナイフはおもちゃではないはずだし、他にも何か力があるのは予想できた。

次にさつきから会話をリードしていたエリルを見る。自分が来るのを予期していたようだし、かなりの切れ者であることは間違いない。丁寧な口調と眼鏡の奥の読めない目、そして見たこともないような武器らしきもの、どうにもよくわからない人物だった。

そして一行のなかで一番大柄な中年の男、バーンズを見た。外されて立てかけてある大剣は妙な形をしていて、いかにも使い古されている。髪には白いものが目立つが、一行の中では最も体格がよく、まさに歴戦の戦士という雰囲気だった。

最後はレンハルト。バーンズほどではないががっちりとした体格で、浅黒く精悍な容貌をしている。剣はベルトに、盾は椅子に立てかけてあり、借り物か何かなのか、それはどちらもあまり馴染んでいないように見えた。雰囲気もあまり馴染んでいない感じなので、恐らく途中から加わったのだろうと見当をつけた。

そうしているうちに食事は終わり、まずエリルが口を開いた。

「では、あなたの用件を詳しく聞かせてもらおう前に場所を変えましょうか、レノールさん」

そうして立ち上がると、五人でアランとレノールの部屋に向かい、思い思いの場所に陣取った。椅子に座ったレノールは四人を見回し、しゃべり始めた。

「まずはあらためて自己紹介するけど、あたしはレノール。この町の自警団で主に斥候とかをやってるんだけど、今回はあんたらを調べろって言われたわけ」

「それで、なぜまともに調べずにこんなことを？」

「簡単に言うと、最近うちの自警団に妙な動きがあつてね。それを調べるために外部の連中で力があるのを探してたんだけど、やばい道を通ってきたっていうあんたらなら、十分な力があるだろうと思つたってわけだ。ま、あとは人物だからそれを確認してやろうとこ

こに来たわけ」

アラン達四人は黙って話の続きを待つ。レノールはそこから声のトーンを若干落とした。

「実は自警団の上のほうに魔族とつながりを持つとうとしているっていう噂があつてね。確証もないし、わかったところで手のうちようもないんで、静観してたんだけど、ちょうどあんたらのことを調べろっていう仕事きてね」

「それで動こうと思ったわけですか。中々悪くない勘ですね」

「まあそいうこと。で、そちらの返答は？」

エリルは返答を促すようにアランに顔を向けた。アランはそれを受けて少し考える様子を見せてから、口を開いた。

「魔族と聞いたら黙って見過ごすわけにはいかないね。力を貸すよ」  
レノールはその答えを聞き、しばらくしてから立ち上がった。

「礼を言うよ、アランさん。ところで、魔物の件を確認しに行くのはどちらさん？」

バーンズがレンハルトを見てうなずいて見せた。

「それは私とレンハルトで行く。何か注意しておくようなことはあるのか？」

「別に、普通以上の警戒は必要ないだろうね。うちのほうからもちやんとしたのがつくだろうから、心配はいらない」

そこまで言つてレノールは立ち上がった。

「じゃ、あたしはこれで。また明日来るよ」

「ええ、じつくりやっていきましようか」

エリルとレノールは視線を交わし、それから人は並んで部屋から出て行った。アランはそれを見送つてため息をつく。

「うまくいくような、なんだかめんどくさいことになるような」

それにバーンズは笑つて応じる。

「どちらにせよ、エリルならば必ず何かの成果をあげるでしょう。できれば我々が戻るまでは待つていてもらいところですが」

「エリルのことだから、やるとなれば自分だけでもやるだろうけど

ね」

「そうですね。できるだけ早く戻ってこられるようにします」

「よろしく。レンハルトも気をつけて頼むよ」

「はい、アランさんも気をつけてください」

それからバーンズとレンハルトは自分達の部屋に戻り、アランはエリルの帰りを待たずにさっさと寝ることにした。

## めんどくさいこと

それから三日後、バーンズとレンハルトは自警団と共に町を出発していた。町に残ったアランとエリルだったが、エリルは連日のように休みなく動きまわっていて、アランは暇を持て余していた。

まだ朝だというのにベッドに寝ていたアランは右手の人差し指の指輪をいじくっていた。質屋で見つけた指輪は大地の精霊の力によく馴染んでいたもので、いざという時に使えるように精霊の力を仕込んでおいている。

そのまましばらく横になっていたが、それにも飽きたアランは起きて外にでることにした。町は到着した日から特に変わることない様子で、不穏な雰囲気は感じられない。

そうしてアランがうろろしている頃、エリルは町外れの人気のない場所でレノールと向かい合っていた。

「今夜か明日の早朝あたり、なにかありそうな雰囲気だね。こっちのほうで動くとなにも出てこない可能性もあるし、ここはあんたらに警戒しておいてもらいたいんだけど」

「二名だけでは不安ですか？」

「逆に聞くけど、大丈夫なのかね」

「ああ見えても、アラン様の実力は自警団員が束になってかかってもかなわないほどですよ。もちろん私も劣るものではありませんから、心配はありません」

「すごい自信じゃないか」

「二人では仮に町が大規模に襲撃されたら人手不足ですけどね。そこらでも多少は準備してもらいませんか」

「大規模な襲撃なんかはない。向こうだって魔族と手が結べるまでは隠しておきたいはずだし、それに目的はこの町を襲うためじゃないはずだ」

「町興しですか？」



エリルは軽く笑って見せた。レノールはそれにたいして無表情で頭をかいた。

「魔族なんかと関わったら、ノーデルシア王国が黙ってないじゃないか。あそこの王様は魔族や魔物には容赦ないからね」

「町がこのままにいるためには、今の状態が続けたほうがいいというわけですね」

レノールは黙ってうなずいた。エリルは同意するように軽くうなずき、背を向ける。

「では今晚、またここで落ち合いましょう」

「ああ」

エリルはレノールを残してその場から立ち去った。

そして時刻は昼、アランはこの三日来ている食堂に入っていた。入口近くの席に座ると、すぐに店員が近づいてくる。

「いらっしやい。今日は何にします？」

「てきとうに、なんかおすすめのものので頼むよ」

「少々お待ちを」

料理が運ばれてくるまでアランは店内を見回す。客はそれなりに入っていてその中には常連の顔も多い。そして、店内で食べる客だけでなく、自宅から鍋を持ってきて料理を買っていく者も多い。

アランの横を一人の鍋を持った少年が通ろうとした時、足がもつれて体勢を崩した。アランはすぐに反応して、左手で鍋を、右手で少年の体を支えた。

「大丈夫かい？」

「は、はい、どうも、ありがとうございます」

「ほら、熱いから気をつけて」

アランは少年を立てさせてから、鍋を手渡した。少年は頭を下げると、今度は慎重に店を出て行った。

「大したもんだな、あんた」

アランの向かい側に座っていた男が声をかけてきた。鎧を着て剣を提げている傭兵風のまだ若い男だった。

「別に大したことじゃないよ」

「いいや。ところで、見たところあんたもこの町の人間じゃなさそうだが」

「まあね、ここには旅で立ち寄ったんだよ。そっちは？」

「俺は隊商の護衛でな、商売が終わるまではここでぶらぶらしてるんだ。あんたは？」

「僕のほうもしばらくはここで足止めだな」

「そうかい、俺はロニーだ。よろしくな」

「僕はアランだ」

そうしている間にアランの料理が運ばれたきたので、料金を払った。それから二人とも黙って料理を食べていたが、しばらくしてロニーが口を開く。

「そっぴや、最近魔物が出てる道っていつのを知ってるか？」

「まあ、知ってるけど」

「なんでも、それが片付けられたらしい。わざわざそんなことをするなんて、物好きな連中もいるもんだよな」

「確かにね。でも、そのぶん安全になるんだし、いいんじゃないかな」

「そりやそうだ、感謝しないとな。じゃ、また会おうぜ」

ロニーは立ち上がって外に出て行った。アランは軽く手だけ振ると、自分の食事をゆっくりと終わらせてから、店の外に出た。

「お食事はどうでしたか？」

突然エリルが後ろから声をかけてきた。

「おいしかったよ」

それだけ言ってアランはそのまま歩き続ける。エリルはその横に並ぶと歩調を合わせた。

「今夜から明日の朝までの間に何かが起こるかもしれません。自警団の者も数だけ動けるようですが、基本的には私とアラン様で対応することになりますね」

「二人でなんて、ちよっとめんどくさくないかな」

「仕方ないです。それに、この三日ゆっくり休んでいたんですから、そろそろ働いてもいい頃だとは思いますが」

「わかったよ、そういうことなら今のうちに寝とこう」

「寝すぎないようにしてくださいよ」

「大丈夫さ。エリルのほうこそ、ちゃんと休んでおいたほうがいいと思うけど」

「私は問題ありません。時間になったら宿に迎えに行きますので」「じゃ、よろしく」

アランは宿に、エリルはそのまま町の外に向かった。エリル事前に調べておいた町に進入しやすいような場所に到着すると、腰のホルダーから一枚のカードを取り出した。

それから、それを目立たない手近な木に押し付けると、それはその場に貼りついた。エリルはそのカードの中心に指を置く。

「発動」

つぶやくと同時にカードがわずかに震えた。エリルは魔力がちゃんと放出されているのを確認すると、その場を立ち去り、次の場所に向かう。そうして町の周囲に次々とカードを設置していった。

それから時間が経ち、時間は夜。寝ていたアランはエリルに叩き起こされていた。

「寝すぎないようにしてくださいと言いましたが」

「ちゃんと起きたじゃないか。それより行き先は？」

「すぐですよ」

そう言っている間に、二人は昼間にエリルとレノールが会っていた場所に到着した。そこでしばらく待っていると、レノールが静かにやってきた。

「そろつてるみたいだね」

エリルはうなずき、口を開く。

「町の周囲で何かあればわかるようにしてあります。外からの場合ですがね」

「町の中はあたし達でやる。あんた達は北門と南門を頼むよ」

「わかりました。アラン様は南を頼みます、私は北門に行きます。

何かあったら合図を送りますから、注意しておいてください」

「わかった、注意しておくよ」

三人は別れ、それぞれの持ち場に向かった。

## 湧き出るもの

アランは夜の町を歩いていた。今のところ怪しい気配は感じないが、それでも気は抜かずに用心している。

人通りはあまりないが、それほど物騒な雰囲気ではなく、自警団のパトロールもそれなりにいて、アランはとりあえずそれには見つからないようにしておいた。

そうして町の南門に向かって行く途中、昼間に見た顔を見かけた。アランは隠れようとしたが、それより早く相手に見つけられてしまった。

「よおアラン、こんな時間に何やってるんだ」

機嫌の良さそうなロニーだった。

「散歩さ。そっちは？」

「ちよつと楽しんできたんでな、酔い覚ました」

「そうかい、じゃあ気をつけて」

「ああ、お前もな」

二人は別れようとしたが、そこでアランは危険な気配を感じ、すぐにナイフを抜いた。

「気をつけるんだ！」

ロニーはその声に反応して、考えるよりも早く自分の剣を抜く。  
「なんだ！？」

アランは返事をせずに右手のナイフを逆手に持ち替え、自分の足元の影に突き立てた。そこから黒いものが逃れ、あっという間に人のような形をとった。

「こいつは」

「新種の魔物だよ。全く気配を感じさせなかった」

「そうか、こいつが噂の。なんかやばそうだな」

アランとロニーはそれぞれ武器を構え、その黒い魔物と対峙する。魔物の右腕が蠢き、その先が剣のような形に変形した。

「いっばしに剣士だつてか？」

ロニーは馬鹿にしたようにつぶやくが、それと同時に魔物が襲いかかってきた。その動きは速く、あつという間に間合いを詰めると剣を振り下ろす。ロニーはなんとかそれを剣で受けたが、体勢を崩される。

さらにもう一度剣が振り下ろされようとしたが、横からの爆発で魔物の体は弾き飛ばされる。アランは上空に投げていたナイフをつかむと、すぐに魔物とロニーの間に立つ。魔物は何のダメージも無い様子で立ち上がり、再び剣を構えた。

「ちくしょう、剣は苦手なんだよ」

ロニーが毒づきながら体勢を立て直し、アランの横に並んで剣を構える。魔物は再び動きだしたが、それよりも速くアランが距離を詰めて剣をナイフで押さえ込んだ。

間近で見ると、魔物はあれだけ自由に姿を変えるにもかかわらず、非常に硬質で、作り出された剣も本物と全く変わらない手応えがあった。

魔物はいったん後ろに跳び退くと、今度は左手が剣に変形し、左右の刃でアランに襲いかかってきた。鋭く、素早い攻撃が繰り返されるが、アランは身のこなしと二本のナイフで全ての攻撃をさばく。ロニーはその光景を見て驚いていた。アランを見て実力はあると思っていたが、ここまでできるのは予想外だった。それと同時に興味も沸いてきて、援護をするよりも、とりあえずよく観察することにした。

アランはしばらくの間は受けに徹していたが、いきなり雰囲気を変えると、一気に攻勢に転じる。二本のナイフが閃き、魔物以上のスピードでどんどんそれを追い込んでいく。

「はあっ！」

気合と共にアランの蹴りが叩き込まれ、魔物の体が飛ばされる。それからすぐにアランは右手のナイフを地面に刺し、地面を削りながら走り出す。

魔物は立ち上がったが、アランの左手のナイフの一撃で再びその体勢が崩される。そして、地面を削っていた右手のナイフに力が込められる。

跳ね上げられたそれは、土が強靱に固められ、無骨で巨大な剣のようになっていた。それが一気に振り下ろされ、魔物を真っ向から叩き潰す。

その体勢のままアランが力を抜くと、巨大な剣は元の土となり崩れ落ち、魔物も一部だけが残っていたが、すぐに蒸発して消えてなくなった。アランは立ち上がると、ナイフを収めてロニーに近づいていった。

「怪我はないかい？」

ロニーは剣を収めてから自分の体を確認する。

「ああ、俺は大丈夫だ。それより、お前がここまでやるとは思わなかったよ。まさか、精霊使いだったとはな」

「精霊の力だとよくわかったね」

「これでもけっこう色々見てるんでな。最後のあれが魔法じゃないってのはわかった。だとしたら、精霊の力でもないと、あんなことはできないだろ？」

「まあ、そんなところかな。それより、少し派手にやったから自警団が来る前にここを離れよう。面倒だし。いやその前に合図をしておかないといけないな」

そう言ったアランは空に向けて火の玉を放った。それは町の中ならどこでも見える規模の爆発をした。

「こりゃ騒ぎになるぞ」

二人はすぐにその場から離れていった。

一方その頃、エリルは魔物に遭遇することなく、夜の町を歩いていた。だが、アランの花火を見ると立ち止まり、額に手を当てた。「派手すぎですね。しかし、トラップにかからなかったのはどういうことなのか」

エリルはつぶやきながら、騒然となってきた通りを見つめた。し

かし、当初の予定は変えずに、とりあえず町の北門に向かうことにした。

しばらく歩いて目的地に到着してみると、そこでは門番が全員倒れていた。エリルは周囲を見回してから慎重にそこに近づいていく。膝について倒れている者の一人を調べてみると、目立った外傷はなく、意識がないだけのようだった。エリルはその体を抱えて額に手を当てると、回復の魔法を使って目を覚まさせる。

「っ！」

門番は目覚めると同時に動こうとしたが、エリルはその動きを無理矢理抑えて落ち着くまで待った。そして門番が落ち着くと、静かに口を開く。

「何があつたのか、聞かせてもらえますか？」

門番はまだ当惑しているようだったが、それでもエリルの問いに答えようとした。

「わからない。突然何か影みたいなのが後ろからかぶさってきたと思つたら、そこで」

「そうですか。すぐに助けが来ますから、下手に動かないようにしててください」

それからエリルは門番の体を門に寄りかからせて、再び町の中に戻っていく。その頭の中にあるのは、まともな魔物や人なら確実にかかるであろうトラップにかからなかった存在。とは言っても、まともな道を通って正面から来たのなら、かからないようにはしてあったのだが、門番の話ではルートがそうであっても、まともに大手を振って来たのではないのも明らかだった。

とりあえず、何かと遭遇したはずのアランと一度合流することに決めた。だが、その考えは町の上空から響いた轟音で遮られた。

エリルが空を見上げると、そこにはさっきアランが放った火の玉とは比べものにならないサイズのものが浮かび、町を照らしていた。



## 邪な力

ロニーは空の巨大な火の玉を立ち止まって見上げていた。

「おい、あれはやばいんじゃないか」

アランも同じようにして立ち止まり、鋭い視線で空を見ながらうなずいた。

「確かにね。ロニー、君は自分の武器を取ってきておいたほうがいい。剣は得意じゃないんだろ」

「ああ、それもそうだな。で、お前は行くのか？」

「あんなことになってるなら、様子を見に行かないとね」

「気をつけるよ」

ロニーに見送られ、アランは火の玉の真下に向かって移動し始めた。

一方、エリルも同じようにその場所を目指していた。その途中、少し焦った様子のレノールと合流した。

「あんた、あれがなんだかわかるか？」

「いいえ。しかし、門番が倒されていたのと関係があるかもしれない。アラン様のほうでも何かあったようですし、急ぎましょう」

レノールは無言でうなずき、エリルと並んで走り出した。二人が到着してみると、そこにはたくさん野次馬が外に出てきて空の火の玉を見上げていた。

それ以外に変わったところはないようだったが、エリルはその場を見回してからレノールに鋭い視線を向ける。

「すぐにこの人達を避難させたほうがいいですよ。あれが落ちてきたりしたら、大変なことになります」

「確かにそうだ。あんたはあのでかいのを頼むよ」

「なんとかしてみましよう」

レノールはすぐにその場の自警団員を集め、野次馬達をその場から立ち去らせるべく動き出した。エリルはそれを横目で見ながら眼

鏡を外すと、魔法槍を組み上げ、火の玉の真下に立った。

しばらくの間そうしていたが、火の玉は動かず、野次馬だけはほとんど姿を消していた。エリルはその間もずっと気を抜かずに魔法槍を構えたまま、上空をじっと見ている。

数秒後、上空の火の玉が突然収縮していった。その中心に見えてきたのは一つの人影。

「あれは」

レノールはわずかに驚きを滲ませた声でつぶやいた。エリルも若干驚いた表情を浮かべている。

「まさか、立場のある人とここで会うとは思いませんでしたね。エクサさん」

名を呼ばれた人影は、軽く首をかしげてから降下し、エリルの前に立った。

「こんな予定ではなかったんだがな」

そのつぶやきにレノールが一步前に出た。

「予定というのは、ということかですかね」

エクサはそれにたいして少し考え込むような仕草をしてから口を開く。

「私の行動はこの町のためだ。そのためなら、なんだってするのはわかっているだろ」

「もちろん。でもその力も、予定というのも知りませんがね」

レノールは投擲用のナイフを手についた。だが、エクサはそれを全く無視したあたりを見回す。

「しかし、誰があれを倒したのか。並みの実力でできることも思えないが」

「あれというのは、魔物かなにかですか？」

エリルは魔法槍を構えたまま、エクサの側面に移動しながら話しかけた。エクサはそれにも目立った反応をせずにさっきと同じ調子で答える。

「そう、魔物だ。私の力のお披露目として考えていたのだがな。軽

「手違いだ」

「では、手違いついでにあなたにその力を与えた者が誰か、聞かせてもらいましょうか」

エクサは体の向きを変え、エリルと正面から向かい合った。そして、嘲笑を浮かべる。

「知る必要はないな」

そこでエリルは魔法槍の先端に氷の穂先を出現させた。

「では、少々手荒い方法をとらせてもらいましょう」

エクサは嘲笑を顔に貼り付けたまま、レノールに視線を送る。

「レノール、お前は どうするんだ？」

それにたいしてレノールは黙ってナイフを構えた。

「そういうことか。まあいい、この力を試させてもらうとしよう」

言葉が終わると同時にエクサの右腕が炎に包まれた。そして、一直線にエリルに向かって突進する。腕が振り下ろされたが、エリルはそれを左にステップしてかわした。

だが、すぐにその足元から細い火柱が噴出した。エリルは体をひねってそれをかわしたが、体勢を崩したところにエクサの右腕が再び襲いかかる。

「くっ！」

直撃直前になんとか魔法の盾を展開したが、それはせいぜい衝撃を弱める程度でしかない。エリルの体は吹き飛ばされて地面を転がった。

エクサはさらに追撃をかけようとしたが、そこにレノールがナイフを投げつける。しかし、それは右腕の一振りで弾かれてしまう。レノールはすぐに次のナイフを手にするが、エクサはあっという間に間合いを詰めてきた。

そして右腕が振り下ろされようとした時、レノールの目の前の地面が一瞬で隆起して壁となった。エクサは腕を止めると、その壁を蹴って一度後ろに下がり、あたりを見回した。壁はすぐにもとの地面に戻る。

「面白い力だな」

エクサの視線の先、エリルの後ろに地面に片手をついたアランがいた。

「エリル、大丈夫かい」

声をかけられたエリルは立ち上がり、もう一度魔法槍を構えた。

「遅かったですね。それよりも、あれは私がなんとかしますから、アラン様は周囲に被害がないようにバックアップをお願いします」

「わかった、そっちは任せるよ」

アランは片手だけでなく両手を地面につけた。エリルはそれを横目で見てから、魔法槍に魔力を集中させる。その手から放電が発生し、先端に集まっていく。

「生かしておくのが面倒ですね」

エリルは魔法を使い自分の足元で爆発を起こし、その勢いで一気に加速した。エクサも少し反応が遅れたが、右腕の炎をよりいっそう大きくしてそれに向かい突進する。

二人がぶつかる瞬間、エリルの魔法槍からまるで炎を飲み込むように閃光が走った。そして、交錯したエリルがすぐに振り返ると、エクサの右腕は黒焦げになっていて、ぼろぼろと崩れ始めた。

だが、エクサが顔色を変えずに左腕で右腕を引きちぎると、すぐに新しい腕が生えてきた。エリルはその光景に舌打ちをする。

「人間辞めてますね、これは。仕方ありません」

エクサは新しい腕を確かめるように一振りする。すると、そこから周囲に数発の火の玉が放たれた。アランが両手に力を込めると、その火の玉の前全ての地面が隆起し、それを遮る。それから間髪入れずに水が勢いよく湧き出し、火は完全に消えた。

そこにエリルが踏み込み、魔法槍でエクサの足元を薙ぎ払う。それは後ろにさがりかわされたが、その軌道から爆発が発生し、エクサは体勢を崩される。エリルはその隙に魔法槍の中心を持ち、それを中心から二つに分離させた。

「ファントム」

つばやくと同時にその二本を交差させる。そこから青い光が発生し、ロングソードのような形を作った。

エリルは前傾姿勢でエクサに突っ込んでいく。エクサは両腕に炎をまとわせてそれを迎え撃とうと構えた。しかし、エリルが逆袈裟に振り上げた剣に右腕が切られ、さらにそこからその剣を振り下ろし右腕を完全に切り落とす。そしてそこからさらに一歩踏み出し、左手の剣でエクサの体の中心を貫いた。

エクサは体を貫いた光の剣をつかもうと左手を動かすが、その動きは途中で止まった。その体からは見るからに力が抜けていき、末端から霧のように消え始めた。

「まさか、そんな」

呆然としたエクサの声に、エリルは笑みを浮かべた。

「あなたのような魔の力を得た者にこれはよく効くでしょう。せいぜい邪な力を求めたことを後悔することですね」

「違う！ 私はあ、あああああああ」

断末魔の叫びを上げ、エクサの体は霧散した。

## きまぐれな変わり者

エクサの消失を見届け、エリルは光の剣を消した。それからアランの元に歩こうとしたが、そこで上空から拍手が響いてきた。

その場の全員が顔を上げると、上空に一人の逞しい体をした短髪の男が浮かんでいた。その腰には一本の長い曲刀がある以外、特に武器は持っていない。

「ここまでできる連中がいるとは、楽しいことじゃないか」

エリルは魔法槍を一つに戻すと、それを構える。

「どちら様ですかね？」

男はエリルのことを見て、あごに手を当てる。

「そっちは魔法が得意な人間か。あれは見事だったな、あれだけ繊細で高度な魔法は初めて見たが、まあ今はいい」

男はそれからアランに視線を移した。

「それよりも、そっちの精霊使いに興味がある。どれだけの力があるか、試してみたいんだが、どうだ？」

立ち上がっていたアランは、真つすぐ空中の男を見て、二本のナイフを抜いた。

「僕でいいなら相手をしよう。ただし、他の人にも、この町にも一切手を出すな」

男はその返答に笑顔でうなずく。

「いいだろう。俺の名はレモスイド、お前の名も聞いておこうか」

「僕はアランだ」

「アランか、始めるぞ」

レモスイドは地面に降り立ち、曲刀を抜いた。それは不思議なことに鞘がついた状態だった。その鞘は無骨な造りのくすんだ青色で、柄の根元には竜の頭の飾りがあり、まるで刀身を飲み込んでいるように見えた。

「二重の鞘とは妙な剣ですね。それにあの男」

エリルは多少心配気な様子でつぶやいた。

二本のナイフを構えるアランと、鞘がついたままの曲刀を構えるレモスイド、二人の間には刺すような緊張感が満ちている。

先に動いたのはレモスイドだった。曲刀を上段に構え、じりじりとアランとの距離を詰めていく。対するアランは姿勢を低くして、その出方をうかがっている。

そのまま数十秒、二人の距離はすでに一手で互いの武器が届く距離になっていた。アランは低い姿勢から地面を蹴り、そのまま低い軌道で右のナイフを突き出した。レモスイドはそれを横にかわしながら片手で曲刀を振り下ろす。

アランはすぐに体をひねり膝について踏ん張ると、左のナイフでそれを受けた。その瞬間、アランの体がぐつと沈み込む。すぐに右のナイフも加えて支えるが、それでも押し返すことはできない。

「ふむ、体に似合わない力だな。これは魔力か」

「そつちもすごい力じゃないか。まだずいぶん余裕がありそうだけど」

「それはそうだが、普通はこのレベルでも受けられる人間は滅多にいない」

そしてレモスイドは曲刀を両手で握ると、さらに力を込めてアランを押しつぶそうとする。アランは徐々に押し込まれていくが、いきなり左手のナイフを手放すと、その手を曲刀に当てた。

「バースト！」

爆発が剣をそらし、アランはその隙に転がりながらナイフ拾ってレモスイドとの距離をとった。レモスイドは剣をゆつくりと構えなおし、笑った。

「剣術は癖があるがいい動きだし、魔法もなかなかだ。それに、機転もきく。まだまだ成長の余地も十分にありそうだ」

「褒めてくれてありがとう。ついでにあなたの目的も教えてもらいたいな」

「目的？ いいや、これといってないが、今はお前と戦ってみたい」

なっただけだ」

「なら、さっきのはなんなんだ。あれは魔族が力を与えたとは思えない」

「さっきの？ ああ、あれは違う。たぶん俺以外の誰かがやったんだろ。俺もまあ一応は魔族だが、そんなことには特に興味がない」  
レモスイドの言葉に、その場の雰囲気が重くなった。エリルは言葉の意味をよく考えてみる。確かにレモスイドはアランの要求通り、周囲に被害が及ぶような戦い方はしていない。しかし、だからといって信じていいかはわからなかった。

アランもなにかを考えていたようだが、すぐに吹っ切ってナイフを構えた。

「信じるよ。あなたが僕と戦いに来ただけというのを」

「そうか、じゃあ続きだ」

アランとレモスイドの二人はもう一度その場に張り詰めた空気を作り出した。それからアランはおもむろに左のナイフを鞘に収める。そして、アランは右のナイフを地面に突き立てた。それが引き抜かれると、凝縮された土が剣のような形をとり、ナイフをロングソードのようなものに変えた。レモスイドはそれを楽しそうな表情でそれを見てから、先に動いた。

正面からしかけたレモスイドはまずは上段から激しく曲刀を打ち込む。アランはそれを右手の剣で受け流すが、レモスイドは片手で鮮やかに曲刀を振り回し、次々に斬撃を繰り出す。

アランは押されはしているものの、攻撃は全て防いでいる。そして、レモスイドが繰り出した上段からの強烈な一撃を剣で受けようとする。

だが、それは受ける直前で崩れ落ち、レモスイドの一撃は空を切った。アランはそこから踏み込み、左のナイフを逆手で抜いてそのまま切りつける。避けられそうにないタイミングだったが、レモスイドは予備動作もなく、それを上空に跳んでかわした。

そのままアランの背後に着地し、レモスイドは間髪入れずに地面



を蹴る。そして、地面を撫でるような軌道から曲刀が振り上げられるが、アランはそれを左のナイフで受けようとするが、ぎりぎりまで押し込まれてしまう。

アランは咄嗟に踏ん張るのをあきらめ、右のナイフを自分の左のナイフにぶつけ、そのままレモスイドの攻撃の勢いを利用して横っ飛びしてから地面を転がった。

レモスイドはすぐに方向転換し、アランを追って曲刀を振り下ろそうとした。だが、アランは体勢を整えるまえに地面に勢いよく手を叩きつける。その部分の地面が勢いよく隆起し、レモスイドの攻撃はそれに遮られた。

隆起した地面はすぐに元に戻ったが、その隙にアランは体勢を立て直し、レモスイドも改めて曲刀を構える。そして二人が再び衝突しようとした時、突然その中心に氷の牙が突き立ち、その動きを止めた。

「そこまでだよ、君達」

いつの間にそこにいたのか、長髪でローブをまとった男が少し離れた場所に立っていた。レモスイドはその姿を見ると、ため息をついて曲刀を鞘に収めた。

「お前か。久しぶりだが、何の用だ？」

男はその問いに笑顔で首を横に振る。

「その前に、そっちのアラン君も武器を収めてくれないかな？」

アランはしばらく男のことをじっと見ていたが、結局言われた通りにナイフを鞘に収めた。男はそれを確認してから、エリルとレノールに顔を向ける。

「そっちの二人も、武器はしまってもらいたいね。僕は別に戦いに来たとかそういうことはないから」

エリルは疑わしそうな表情ではあったが、アランが武器を収めていたので自分もそうした。レノールもそれにならう。男はそれを見て満足そうにうなずく。

「これで話をできるかな。じゃあ場所を変えよう、ここじゃ落ち着

かないだろ？」

男はさつさとその場から歩き出す。レモスイドはすぐにその後を追いつ、アランも続いた。エリルはため息をついてからレノールのほうに顔を向ける。

「レノールさん、ここは頼みます。あつちのほうがいぶ面倒なことになるそうなので」

それだけ言うと、エリルも先に行った三人の後を追った。

## 珍客

アラン達四人は町の外、人気のない林の中に来ていた。ローブの男はてきとうな木によりかかって三人を見回す。

「さて、まずは自己紹介をしようか。僕はファスマイド、そっちのレモスイドと同じように魔族さ」

「ファスマイド？ 聞いたことがありますね」

エリルがつぶやくと、ファスマイドは軽く笑う。

「そう、僕は君達の王様と会ったこともあるからね。最近はやつとご無沙汰してるけど」

「思い出しました。たしか、伝説の勇者と面識がある魔族がいるという噂を聞いたことがあります」

「よく知ってるね。まあ話は伝わっててもおかしくはないか」

「勇者と共にあった、あの方のことは知っているのですか？」

「ああ知ってるよ、彼女は恐ろしく強かったしね。僕だって怖いくらいだった」

「そうですか」

エリルは満足げにうなずいてから、アランに目配せをして一步下がった。ファスマイドはそれを見てからアランに視線を移す。

「アラン君、いや王子と言ったほうがいいかな」

「元王子だから、別に気にする必要はないよ。それより、何をしにきたのか教えてもらいたいな」

「それもそうだね。まあ簡単に言うとノーデルシア王国でもしろいこと、つまり君のことがあったから、それを見物させてもらおうと思ってるね。そうしたらこいつが張り切ってでしゃばってきたわけだど」

レモスイドは顎を手でかく。

「仕方がないだろう。あれだけ面白そうなことをやってたら手を出さないほうが難しい」

「時と場所を選んでもらいたいね。あんな状況でアラン君が本気を  
出せるとも思ってるのかい？」

「それなりの力を出せるだろう。とりあえずはそれで十分だ」

「まったく、困ったものだね」

ファスマイドは肩をすくめてアランに同意を求めた。だが、ア  
ランはそれにはつき合わずに首を横に振る。

「それより、あの人に自分の力を与えた魔族について知りたいんだ。  
あなた達は何か知っているようだから、教えて欲しい」

「知ってどうするつもりかな？」

「あんなことをする魔族を放っておくわけにはいかない」

「なるほどね。それならわかった、と言いたところだけど、その  
魔族に心当たりはあっても、今どこにいるかとか、そういうことは  
わからないんだよね」

ファスマイドの言葉に、レモスイドもうなずく。

「そうだな、あいつは用心深い。なかなか自分で何かしようという  
奴ではないしな。だが、いつまでも隠れているような性格でもない」

レモスイドはそこで言葉を切り、エリルを見た。

「自分が力を与えた者を倒されたんだ。たぶんお前達に興味を持っ  
て、色々しかけてくるだろう。そのうち直接会える」

「そう、だから焦らないでのんびりしてればいいよ」

レモスイドとファスマイドの言葉を受け、アランは少し考える姿  
勢をみせた。そして、答えはすぐに出る。

「そういうことなら、むこうがしかけてくるまで待つことにしよう」

「そうか、じゃあ僕は邪魔にならないように見させてもらおうとし  
よう。それじゃあ」

それだけ言うと、ファスマイドの姿はその場から霞のように姿を  
消した。レモスイドはそれを見ると軽く舌打ちをしてアランのこと  
を見る。

「俺はお前達の近くにいることにしよう。あいつが出てくるのなら  
会っておきたいからな」

そう言つてレモスイドもその場から立ち去ろうとした。

「待つてください」

だがそれをエリルが止めた。

「先ほどから言っているあいつというのが誰だか、具体的に教えてもらえますか？」

「出てくればわかる。だがそうだな、あいつの名前はフィエンダ。見た目はなよなよしてるが、油断しないことだな。ま、互いに用心しておくことにしようじゃないか」

レモスイドは今度こそその場から立ち去った。残されたアランとエリルはしばらくの間黙つて立っていたが、どちらからということもなく、宿に足を向けた。

翌朝、宿の食堂に行つたアランを待つていたのは、大量の朝食を自分の前に並べているレモスイドだった。

「よお、意外と早いな」

「ここでなにを？」

「お前達の近くにいると言つただろ。ここが一番都合がいい。それと、俺のことは呼び捨てでかまわないぞ、仲良くやろうじゃないか」

「わかつたよ、レモスイド」

そこでエリルが食堂に入ってきて、アランよりも先にレモスイドの向かい側に座つた。

「それより、あなたが信頼できる証拠でも見せてもらいたいですね」  
その隣に座つたアランを見てから、レモスイドは薄く笑う。

「俺はしばらくは手を出すつもりはない。なんなら、この剣を預けておいてもいいぞ」

レモスイドは剣の鞘をつかんだが、エリルは首を横に振つた。

「そんないかにもいわくのありそうなものはいりません。妙な動きをしたらこちらにはいつでも準備があるというのを覚えておいってください」

「それは楽しみだ」

レモスイドは楽しそうな様子でそう言うと、自分の朝食を片っ端から食べ始めた。アランとエリルもそれぞれのテーブルについて朝食にすることにした。

「それで、今日の予定は」

「私は自警団のほうに行つてきます。色々面倒なことがあるでしょうから、しばらくかかりますね」

「しばらくっていうと、何日くらいかな？」

「それはわかりません。まあ長くなるのは間違いないので、暇にまかせておかしなことはしないようにしてくださいね」

「大丈夫だよ。もうすぐバーンズ達も帰ってくるし」

「だいいいですね。くれぐれもその人、いや人ではありませんか、とおかしなことを始めたりしないでください」

「まさか」

アランは首を横に振つてゆっくりと朝食を食べ始めた。エリルも食べ始めたが、パンを少し食べてからすぐに立ち上がった。

「では、私は出かけてきます」

エリルはそう言つて宿から出て行つた。アランはそれを手を振つて見送ると朝食を再開する。そして、気がつくとレモスイドが向かい側に座つていた。

「何か用かな」

「ちよつとお前のことを聞きたいと思つてな。旅をしているらしいが、どこから来たんだ」

「あのファスマイドっていうのから聞いてなかったのかい？」

「知らん。俺はお前達人間のことにはそんなに興味がないからな」

「ノーデルシア王国は、知ってるね」

「ああ、それは知ってる」

「僕達はそこから来た。とりあえず言えるのはそれだけだよ」

「そうか、まあ別にどうでもいいことだが。それより、少しつき合えというか、町を案内しろ」

「まあ、町の案内だけならいいか。行こう」

アランは朝食を切り上げて立ち上がった。同じように立ち上がったレモスイドの顔には笑顔があった。

「楽しみだな。まあ礼はしてやる」

「期待しておくよ」

## 傷を持つ者

宿を出たアランはレモスイドを先導して歩いていた。

「ところで、宿代はどうしてるんだい？」

「人間の金くらいいくらでも作り出せる」

「それは大変だ。そんなことができるなら、ひっぱりだこだろうね」

「俺は人間のことにほとんど興味がないから、自分が使いたい時しか使う気はない」

「なら安心だ。いや、もったいないか」

そんな調子で歩いていると、二人はいつの間にか町の南門の近くまで到着していた。昨晚のことがあった直後だが、特別物騒な雰囲気もなく、町に新しく来た人間などで賑わっていた。

その中でフード付きのケープをまとった一人の人間が町に足を踏み入れた。その視線はアランとレモスイドを見つけると、そこで止まった。そして真つすぐにその二人に向かって近づいていく。

アランがそれに気がついた時にはその人間は二人の目の前に立っていた。アランよりも身長が高く、顔はフードで影になっているのでよくわからない。

「おい」

押し殺した声が響いた。アランはその迫力をいなすように首をかしげる。

「なにか用かな？」

「あんたじゃない、そっちのほうだ」

フードの奥からの鋭い視線がレモスイドに注がれる。レモスイドはそれを笑みを浮かべて見返した。

「それは面白い。だが、確か人間は顔を見せないのは失礼というんじゃないかったか」

その言葉に应えて、フードが後ろに下ろされた。見えてきたのは、鮮やかな真紅の髪を頭の後ろで結わえ、顔に無数の傷跡を持った女



だった。

「お前は魔族だろう。あたしにはわかるんだよ、お前らの臭いが」

「臭いか、それは初めて聞いた」

「ついてこい、ここは人が多い」

「いいぞ、面白そうだ」

レモスイドが先に歩き出し、女がその後続き、さらにアランはその後ろについていった。そして三人は人気のない林の中で立ち止まる。

それから女は振り向くと、まずはアランを見た。

「最初に聞いておくけど、あんたはそっちの魔族とはどういう関係なんだ」

「昨日戦ったけど、色々あって町を案内していたんだ」

アランの一言に女はあきれたようにため息をついた。

「つまり、魔族だと知ってて一緒にいるっていうのか。大した神経だ」

「たまに言われるよ」

「まあいい、邪魔をしなければ用はない」

それから女はケープを取ってその場に投げ捨てた。装備は軽装で、皮でできた胸当てをしているくらいでしかない。

「魔族、お前の名前を聞かせてもらおう」

「人間は先に名乗るものだったと思うが、まあいい。俺はレモスイドだ」

「じゃあ聞かせてやろう。あたしの名はティリス」

そしてティリスは姿勢を低くして構えた。アランはその姿を見て、その中に精霊の力を感じた。だが、その力はなにか普通とは違い、違和感があった。

それが何かを確かめる前に、ティリスはレモスイドに向かって飛び出していった。その速度は人間に出せるものではなく、アランでも目で追いきれなかった。

だが、そのスピードに乗った突きはレモスイドの手で受け止めら

れていた。それでもその体は突き威力でいくらか押される。

「やるな」

レモスイドはにやりと笑った。ティリスは軽く舌打ちしてから後ろに下がる。

「お前のその力、妙だな。だが、強力であるのは間違いない」

レモスイドは自分の手を確かめるように見た。それからおもむろに曲刀を抜く。ティリスはその鞘がついた剣を見て顔をしかめる。

「どういうつもりだ」

「少し本気を出そうというだけだ。鞘は気にするな」

「そうかい！」

ティリスは再び一直線に突っ込んでいく。レモスイドはそれを避けずに、正面から曲刀で一撃を受けた。素手の突きが打ちつけられたとは思えないような音が響いたが、今度はレモスイドは全く押されずに、突きを曲刀で受け止めている。

ティリスはそこからさらに下段の回し蹴りを叩き込むが、それもレモスイドは曲刀で受け止める。レモスイドはティリスの足を弾くと、曲刀の柄をその体の中心に向けて突き出した。ティリスはそれをなんとか左腕で防いだが、衝撃で後ろに吹き飛ばされる。

なんとかそのまま片膝をついて着地したが、ティリスは突きを受けた腕を痛めたらしく、顔を若干しかめた。

「力はあるが、動きが単調だな」

レモスイドはそう言ってからアランのほうを見た。

「単純な力ならお前のほうが上だが、実力はそっちのアランのほうがあるな」

ティリスはアランのことを睨みつけるようにして見てから、視線をレモスイドに戻した。

「まだ本気じゃないぜ」

そしてティリスは自分右腕を真つすぐ前に伸ばした。それが力強く握り締められると同時に、炎がその腕からほとばしった。

アランはそれを見てエクサを思い出したが、ティリスの炎は圧倒的に強い力と精霊の存在が感じられた。その上、ティリス自身の力も明らかに増大していた。

「ハアッ！」

今までとは比べものにならない速度でティリスが飛び出し、今度は急激に方向転換を繰り返してその背後から殴りかかった。

レモスイドはそれも曲刀で受ける。しかし、さっきとは違い、受けきれずにレモスイドは攻撃をいなしながら地面を蹴って横にかわす。標的を失ったティリスはそのまま一直線に地面を削りながらも、無理矢理停止した。

そこにレモスイドが上から曲刀を振り下ろした。ティリスがそれをなんとか横にかわすと、地面を打った曲刀はその場をえぐり大きな穴を開ける。

ティリスは大きく跳躍して体勢を立て直す。だが、レモスイドはそこで曲刀を鞘に収めた。

「これ以上やる意味はない。まだ力はあるんだろうが、その動きではな。そっちのアラン達にでも鍛えてもらったらどうだ」

そう言うレモスイドは背中を向けてその場から立ち去った。ティリスは齒を食いしばりながらも、レモスイドの言葉には納得していたのか、なにもせずに見送った。それから、構えを解くとアランのほうに顔を向ける。

「アランとかいったな、付き合ってもらうぞ」

「付き合うつて、どうするつもりなんだい？ えーっと、ティリス、でいいかな」

「呼び方なんて好きにしろ。それよりあの魔族が言ったことだ。強いんだろ、お前と仲間」

「まあ、強いと思うよ。とりあえずこんなところじゃなんだし、僕達の宿に行こうか」

「そうだな、ちょうどいい」

ティリスは投げ捨てたケープを拾ってそれを羽織り、先に歩き出

したアランの後を追った。

アランはそれを肩越しにチラリと見ると、その張り詰めたものを感じさせる雰囲気、かすかにため息をついた。

しかし、それと同時に、アランはティリスのことに強い興味も持った。

## 未熟な戦士

ティリスがアラン達と同じ宿に転がり込んで数日、エリルには色々悩みが増えていた。

まず、ティリスは持ち合わせが少なく、アランの意向でなぜかその宿代を負担していること。

さらにレモスイドも相変わらず宿にいて、ティリスがいつも突っかかるうとしているということ。これはレモスイドが相手にしていないので今のところ大事にはいたっていない。

しかし、何よりも困るのは、ティリスが手合わせを要求してくることだった。とにかく馬鹿力だが、直線的な戦い方しかないのでそれをいなしてさばくのは難しくはない。とは言っても疲れることなのは間違いなかった。

そのうえ、ロニーというアランの知り合いになった男が頻繁に宿に訪ねてくるのもうつとうしいことだった。

唯一の救いはバーンズ達がそろそろ戻ってくることくらいで、エリルはその日が一日も早く来て欲しいと思っていた。

だが、その日はまだこないようで、今日も朝からティリスが部屋に訪ねて来ていた。

「おいエリル、今日も付き合え」

エリルはうんざりしたが、アランから頼まれているので嫌とは言えない。まだ寝ているアランを見てから立ち上がった。

「わかりました。アラン様、私は出かけますから、あまり寝すぎないようになしてください」

アランは横になったまま手を振ってエリルを送り出した。エリルは弁当としてパンと水だけ受け取ると、町を出て最近ティリスと手合わせをするのに使っている町の外の空き地に向かった。

空き地に到着すると、ティリスはすぐにケープを脱ぎ捨てて構えた。エリルも仕方なく魔法槍を連結して構える。

「別に殺し合いではないんですから、加減してくださいよ」

「チツ」

ティリスは舌打ちをしてからエリルに突進してきた。エリルはその突進をひきつけてから最小限の動きでかわしてみせる。ティリスはタイミングを外されてよろめきながらも、体勢を立て直す。それにたいしてエリルはため息をついた。

「何度言ったらわかるんですか？　いくらあなたが馬鹿力でも、そんな直線的な動きでは簡単に先が読めますから、初動さえよく見ておけば、かわすのは簡単なんですよ」

「じゃあ、どうすればいいんだ」

「そうですね、動きをもっと速くして、わかってても対応できないくらいにまでになるか、それともフェイントを使うか、どちらにせよ、今の正面からの攻撃だけでは話になりません。そもそも、なぜ素手で戦うんですか？」

「武器はすぐに駄目になっちまうんだ。そんなに金もないから、壊れない自分の拳を使うことにしてるんだよ」

「一体、どんな体なんですかね。しかし、その頑丈な体のわりには傷がたくさんあるようですけど」

「こんなのは大した傷じゃない。あたしが生きてるのが証拠だ」

「わかりましたよ。次は少しは頭を使ってしかけてください」

「言われなくてもそうするぜ！」

ティリスは勢いよく地面を蹴ったが、今度はエリルの直前で無理矢理方向転換をして横に跳ぶ。ティリスの体は大きく流れてしまいが、そこからさらに地面を蹴って上空に飛び上がると、そこからエリルに向かって拳を振り下ろしていった。

だが、エリルは目だけ動かしてティリスの動きをとらえると、軽く後ろにステップしてそれをかわしてみせる。ティリスの拳が地面に突き刺さると、そこは大きくえぐれ、多くの破片が周囲に飛んだ。エリルはそれを魔法槍の一振りですそれを防いでから、一歩踏み出してティリスの首筋にそれを突きつけた。

「この程度では駄目ですね。まあ、さつきよりはずいぶんましですが」

そこでエリルは素早いステップで反対側に動いた。

「ですが、やはり動きが大きすぎですね。とは言っても、あなたに細かいことができると思えませんか、今の調子でやっていけば少しはましになるでしょう」

「そうなのか？」

「ええ、それなら一人でもできるでしょうから、好きなだけ練習できますよ。これで私もあなたとの手合わせから開放されるわけです」  
エリルは非常に晴れやかな表情だった。

その頃、朝食には少し遅い時間に起きたアランは黙々と食べることに集中していた。

「よお、アラン」

そこにロニーが訪ねてきた。アランは軽く手を上げてそれに応じる。

「おはよう。エリルなら今はいないよ」

「え、そうなのか」

ロニーは残念そうな顔をしてからアランの向かい側に座った。アランはその顔を見ながらパンをかじる。

「で、今日は何の用だい？」

「いや、実はな、まあなんというか、俺を雇う気はないか？」

「仕事ならもうあるんじゃないのかい？」

「それだけだな、なんか隊商のオーナーが言うには最初に予定してたよりもこの町に長く居つくらしくてよ。一応引き続いて雇ってはくれるっていう話なんだが、仕事の内容が俺には合わなくて、他にいい仕事がないか探してるんだが」

「それで、僕達が何か面白ことでもやってると思ったとか、そういうことかな？」

「そうだ。俺は傭兵としてはけっこう経験豊富だし、色々と役に立

つぜ」

ロニーにそう言われて、アランは鼻の頭をかいてからすぐに口を開いた。

「まあ、僕たちはこの間みたいな新種の魔物とそれから魔族を追ってるんだけど、正直言って危険だと思うよ」

「そんなことだろうと思ってたぜ。お前は只者じゃなさそうだし、やりがいのありそうなことじゃないか。どうだ、俺を雇うのは？」

「僕はそうしてもいいと思うけど、問題はエリルがどう言うかだね。夕方には戻ってくるだろうから、その時にまた来てくれればいいよ」  
「それなら、よろしく言っておいてくれよ。じゃ、また来る」

ロニーが出て行ったのを見送ってから、アランは朝食を再開した。それが終わる頃に、多少疲れた雰囲気のエリルが戻ってきた。

「早かったね。ティリスは？」

「一人で練習してもらってます。とりあえずそれくらいまではなんとかできたので」

「そうなんだ。で、エリルから見て彼女はどうか」

「馬鹿力と頑丈さ以外はまるで素人ですね。あれは本当に精霊の力なんですか？」

「本人も気づいてないみたいだけど、僕は確かに彼女の中に精霊の力を感じたんだよ。たぶん火の精霊の力だと思うけど、何か妙な感じではあったね」

「もしかしたら、バーンズ様なら何かご存知かもしれません」

「それはあるかもね。ああ、それから、さっきロニーが来てたんだけど」

そこでエリルは若干嫌な顔をしたが、アランはかまわずに続ける。  
「色々あって、僕たちに雇って欲しいって言ってきたんだけど、どうかな？ 僕としては別にいいと思うんだけど」

「雇うんですか」

エリルはため息をついてから、諦めの表情を浮かべた。

「とりあえず私がああ男に関して少し調べます。何も後ろめたいこ



とがないなら、そうしてもいいのではないでしょうか」

「レンハルトの時はそんなことやったっけ？」

「あの人はバーンズ様が保証してくださったので問題ありません。アラン様のようにいい加減ではないんですから」

「ま、それもそうか」

## 帰還

次の日の昼、バーンズとレンハルトが自警団の本部に戻ってきた。ちょうどそこに居合わせたエリルは二人を出迎えた。

「何も変わったことはなかったか？」

バーンズにそう聞かれ、エリルは首を横に振った。

「何もないどころではありませんでした。自警団の責任者が魔族の力を得たり、それとは違う魔族が現れたり、他にも色々なことがありました」

「大変だったようだな。話は後で詳しく聞かせてもらおうとして、と  
りあえずは休ませてもらおう」

「はい。では今晚に詳しく」

「わかった、頼むぞ」

それからバーンズとレンハルトは宿に戻り、エリルは元エクサの部屋に戻ってレノールと一緒に雑事をこなしたりしてすごした。

そして夕方になってエリルが宿に戻ると、昨日は調べがっていないので門前払いにしたロニーが宿の前に立っていた。

「あなたを雇う件なら、まだ時間がかかると言っただけですが」

「いや、俺を知るなら直接のほうが早いと思うんだけどな。どうだい、明日あたり一日一緒に」

「必要ありませんね。あまりふざけたことを言っていると出入り禁止にしますよ」

「わかった、わかったよ。そいつは勘弁してくれ。できるだけ早く頼むぜ」

「まあ、アラン様から言われたことですからまともにはやりませんよ。わかったらお引取りを」

「そういうことなら、俺には後ろめたいことはないし、よろしくな」  
そしてロニーはその場から去っていった。エリルがため息をつきながら宿に入ると、食堂にはバーンズとレンハルトだけがあった。

「アラン様はどうしているのですか？」

「日が落ちる前に出かけられたのだが」

「そうですね、それなら私は少し外を探してきます。バーンズ様達はこちらで待っていてください」

そう言つて外に出たエリルだったが、そこにはちょうど帰つてきたアランがいた。

「アラン様、どこに行つていたんですか？」

「ちょっと散歩してきたんだよ。それよりも夕食にしようか、バーンズ達の話も聞きたいし」

「そうですね、今はとりあえずそうしましょう」

それから四人は食堂に集まった。まずはバーンズとレンハルトが自警団と共に رفتた確認のことについて話した。

そつちであつたことは、多少の魔物との戦闘をしたくらいで、後にはアラン達が魔物と戦つたといふことの確認もできたので、予定通りすぐに帰つてくることができた、というそれだけの話だつた。

もちろんアランとエリルのほうはそれどころではない。だが、そこにティリスが現れて四人のほうに近づいてきた。

「なんだ、その二人があんたらの連れか。けつこつ強そうじゃないか」

バーンズはそれを見て、エリルに問うような視線を向ける。エリルはそれを受けてため息をついてから口を開いた。

「こちらはティリス、色々あつて私が面倒を見えています」

「よろしくな、えーつと」

「こつちがバーンズでそつちがレンハルトだよ」

アランが紹介すると、ティリスは手を差し出して、握られて手を勢いよく上下に振つた。二人ともそれにたいして特に動じることもなく、落ち着いて対応した。ティリスは手を引いてから数回うなずき、近くの椅子に勢いよく座つた。

「で、何の話をしてたんだ？」

「色々やつかい事が起きたという話です。あなたも含めて」

「あの野郎もだろ？　って来やがったな」

ティリスの視線の先には入口から入ってきたレモスイドが立っていた。レモスイドはその位置からアラン達を見ると、バーンズのところでは視線を止めた。

「ほう、これは中々できそうな男だな」

そのつぶやきに反応してバーンズはレモスイドのことをまっすぐ見た。

「あなたは？」

「おっと、これは失礼。俺の名はレモスイド、まあお前達と同じように旅をしているといったところだ」

「なるほど。私はバーンズだ」

バーンズはレモスイドに今にも食いつきそうな顔をしているティリスを見たが、とりあえず放っておくことにした。

「そのうち手合わせをしてみらおうか、バーンズ殿」

それだけ言うとレモスイドは自分の部屋に向かった。

「あいつのことは後で話すよ」

アランはレモスイドのことをその一言で片付けてから、エリルのほうに顔を向けた。エリルはうなずいてから話を始める。

「まず、自警団員のレノールから自警団内部で妙な動きがあるという話がありました。それから数日して、具体的に何かがありそうだという話になったので、私とアラン様で警戒していました。そしてまずは魔物が現れ、次には魔族の力を得たと思われる、自警団の責任者、エクサが姿を現しました」

「魔族の力、ですか？」

レンハルトが首をかしげると、それにはバーンズが答える。

「人間でも魔族や悪魔の力を得ることができるとのさ。もちろん、そうになったら人間とは言えないのだが」

「その通りです。それは私が片付けたのですが、そのあとにさっきのレモスイドという男が現れ、アラン様と戦闘になりました。ですが、そこにファスマイドと名乗る者が現れ、戦闘を止めました」

「ファスマイド、久しぶりに聞く名だな」

「やはり、バーンズ様はご存知でしたか」

「ああ、あの男はかつてタマキ様にも関わったことがある。何を考えているかはわからないが、特別に害のある存在でもないと思うが」  
「はい、二人を止めた以外は特になにもしていません。そして翌日に、このテイリスが現れました。レモスイドと戦ったようですが、ろくに相手にされなかったようで、非常に不本意ですが私が稽古をつけているような状況です」

バーンズとレンハルトは、その話のあまりの盛り沢山さに少なからず驚いているようだった。それからバーンズが口を開く。

「アラン様、レモスイドという男はどの程度の力なのですか」

「強いよ、ちょっと底が見えない感じだね。まあとりあえず危険はないと思うから、気にしないで放っておけばいいよ」

そこでテイリスが舌打ちをしたが、他の四人はそれを流した。

「そんな者が私に興味を持ったとなると、これは大変なことですね」  
バーンズが苦笑いしながらそう言ったため息をついた。それを見てテイリスは身を乗り出す。

「なあおっさん。あんたそんなに強いのか？」

「何を言っているんですか」

エリルがあきれた表情でそれを遮った。

「バーンズ様は剣の達人ですよ、あなたでは相手になりません」

「そりゃいいな、明日あたり手を貸してくれ」

テイリスは後半は聞いていないようだった。

「わかった。アラン様、よろしいですか？」

「別にいいよ、というかよろしく」

### 第三の魔族

翌日、バーンズはティリス、アランと一緒に町の外の空き地に来ていた。

「ここで色々やっていたわけか」

バーンズはつぶやきながら、所々穴が開いたりして地形が変わっている空き地を見回した。かなり激しいことをやらなければ、ここまてになるはずもなく、ティリスの力が桁外れのものであることはよくわかった。

「さあ、早く始めようぜ」

ティリスは早速準備万端で構えをとっていた。バーンズは背中 of 剣を抜いて軽く構える。

「いつでもきなさい」

「言われなくても！」

ティリスは後ろに大きく跳び、そこからさらに上空に跳び上がった。急降下しながら拳を突き出すティリスをバーンズは後ろにステップしてかわした。

拳が直撃した地面は大きくえぐられた。バーンズはその力を見て、まずまともには受けられないものであることを察した。

ティリスはさらにその場から斜め前方に大きく跳躍した。そうして勢いよく着地すると、その位置、バーンズの斜め後方から一直線に突進する。

バーンズがその一撃を剣で逸らすと、ティリスはほとんどそのままの勢いで体勢を崩して地面を転がっていった。

ティリスは土埃まみれになりながら立ち上がろうとしたが、そこに拍手の音が響いて、その動きは中断された。

「さすが、俺の見立て通りの腕だな」

レモスイドがゆっくりとティリスの背後から姿を現した。そして、鞘付きの曲刀をゆっくりと抜いた。

「少し相手をしてもらおうか」

バーンズは無言で剣のスロットにカードを挿し込むと、低い体勢になって構えた。

「ちよつと待て！」

ティリスがレモスイドにつつかかろうとしたが、その前の地面がいきなり隆起した。

「今は手を出さないほうがいいよ」

アランは大声でティリスに告げる。ティリスはバーンズとレモスイドを見ると舌打ちをして、後ろに下がった。

邪魔がいなくなったレモスイドは、曲刀をぶら下げたまま無造作に歩いてバーンズに近づいていく。バーンズは構えたまま微動だにせず、それを見据えている。

そして距離が詰まってくると、バーンズは剣を振り上げた。その軌道から氷の刃が発生してレモスイドに襲いかかった。

レモスイドは曲刀を振ってそれを簡単に砕く。バーンズはさらに連続で剣を振って氷の刃を作り出すが、全て同じように砕かれてしまふ。

バーンズは前に走り出しながら素早くカードを入れ替える。そして今度は上段から剣を振り下ろした。レモスイドはそれを曲刀で受けたが、その瞬間に接触した部分で爆発が起こって曲刀が弾かれる。バーンズはその隙にもう一度剣を叩き込むが、レモスイドはそれを後方に宙返りしてかわした。そこでレモスイドは踏みとどまり、様子を見る。

「その剣は面白いな」

「勇者様から頂いたものだ。どんな手段であつても砕くことはできない」

「それは楽しみだ」

今度はレモスイドが踏み込み、曲刀を袈裟切りに振るつた。バーンズはそれを剣で受けるが、予想以上の力に押し込まれてしまふ。だが、バーンズは身を引きながら受けていた曲刀を逸らし、レモ

スイドと間合いをとった。両者ともお互いの得物を構えなおす。

「まだ、その剣の力を全て出してはいらないな」

「そうする状況でもないだろう」

「いい判断だ」

レモスイドは曲刀を下げ、地面を削るようにそれを振り上げた。

跳ね上げられた土がバーンズに降りかかるが、それは爆発で四散させられる。

それに紛れてレモスイドはバーンズの横にまわり、そこから曲刀をその腹に叩きつけようとする。バーンズはそれに自分の剣を合わせる、その瞬間の爆発を利用して曲刀を弾いた。バーンズはすぐさまそこに踏み込み、横殴りに剣を振るった。だが、レモスイドはその上を跳んでかわす。

バーンズはすぐにレモスイドを追い討ちをかけようとするが、その体は着地と同時にもう一度跳躍してそこからあっさり逃れた。

そこでバーンズは剣のカードを入れ替え、それを振るおうとしたが、次の瞬間二人の間に何かが勢いよく落ちてきた。

「レモスイド、何を遊んでいる」

高く澄んだ声が響き、土煙の中から豪奢な格好をした一人の細身の女が姿を現した。レモスイドはその姿を見てため息をつき、曲刀を収めた。

「フィエンダか。何の用だ」

「ファスマイドと貴様が集まっているようだから、見に来たのだ。で、何を遊んでいる」

バーンズはその様子を見ながら、もう一度カードを入れ替え、油断なく構えた。だが、フィエンダはそちらに全く注意を払わない。レモスイドは首を横に振ってから口を開いた。

「何を言ってる。そもそもこの町の人間に力を与えたのはお前じゃないのか」

「力だと？ そんなことは知らないな。お前がやったわけでないのなら、ファスマイドは何もやらないだろうから、誰か他の奴の仕業



だろう」

「どういうことか、説明してもらえないかな」

そこに手ぶらのアランが割って入った。フィエンダは初めて気がついたような顔をしてその顔を見てから、レモスイドのほうに顔を向けた。

「この人間は何だ？」

「アランっていう人間だ。面白い奴だぞ」

「ほう」

そこで初めてフィエンダはアランのことを見た。上から下まで観察してから、軽く指を鳴らした。その瞬間、アランが一步後ろに下がると、その位置から巨大な刃のようなものが突き出た。

「これを感じて避けるとは、確かに人間にしてはよくやる」

「じゃあ、あなたの知ってることを教えてもらえるかな」

「さつきも言っただろう、私は何も知らん。力を与えるなど、このレモスイドでもないし、ファスマイドの奴もそんなことはしないだろう。他を当てるんだな」

そしてフィエンダは二人に背を向けようとした。だが、その前の地面が隆起してそれを阻む。

「せっかく会えたんだし、そんなに急いでどこかに行くことはないじゃないか」

アランの言葉にフィエンダは振り返った。その視線は剣を構えているバーンズにも注がれる。

「その剣を下ろせ。今は何もする気はない」

アランがバーンズに向かってうなずくと、バーンズは剣からカードを抜いた。フィエンダはそれを確認してから、アランの目を見た。

「で、何の用だ。人間」

「色々教えてもらいたいことがあるんだ」

「なぜ私が」

そこにレモスイドが割って入った。

「まあいいだろ、たまには人間につきあうのも悪くないぞ。それに、

この連中は中々面白いし、あの勇者なんて呼ばれた人間とも関わりがあるらしいしな」

それを聞いてフィエンダはいくらか興味をそそられたようで、髪をかきあげてからレモスイドをどかすと、アランの目の前まで歩いてきて、立ち止まった。

「少しだけつきあってやろう。せいぜい私を退屈させないことだ」

## 大変な宿屋

フィエンダはアラン達と共に、同じ宿に来ていた。フィエンダはなにしろ豪華な格好なので、非常に目立ったが、本人はそんなことは気にせずに堂々としていた。

そうして宿に入ったフィエンダは内部を無遠慮に見回した。その間にレモスイドは金を出してフィエンダの部屋を確保した。

「おい、お前の鍵だ」

フィエンダはレモスイドが投げた鍵を受け取ったが、それを怪訝な表情で見つめた。

「なぜこんなものを渡す」

「お前もここに泊まったほうが面倒が少なくていいだろ」

「まあいい、たまにはいいだろう」

そう言うフィエンダはさっさと自分の部屋に行ってしまった。

それを見送ったアランはすぐに宿を出た。バーンスはその後を追う。

「アラン様、これからどうされるのですか」

「とりあえず様子を見るよ。今のところ害があるわけでもなさそうだし」

「本当にそうでしょうか？」

「宿の二人は人間にはあまり興味がなさそうだし、あのファスマイドっていうのは特に害があるわけじゃないんですよ」

「そうですね、以前も基本的にどこからか見ているだけの魔族でした。それだけでなく、若干協力をしてくるくらいでしたから」

「とにかく、あいつらがおとなしくしてる間にあれの原因を突き止めないといけないね。目を離さないように頼むよ」

「わかりました。大変そうですが、やってみます」

「それじゃ、僕はエリルに会ってくるから」

アランはバーンスをその場に残して、自警団の本部に向かった。到着してみると、ロニーが中に入ろうとして止められているところ

だった。

「ロニー、何してるんだい？」

アランが声をかけると、ロニーは首を横に振りながら振り向いた。  
「エリルさんがここにいて聞いて来たんだけどよ、なぜか足止めをくらってんだ」

「怪しいからだと思うよ。ああ、この人は僕の知り合いだから大丈夫だよ」

アランがそう言うと、顔見知りの自警団員は道を開けた。そして二人は中に入って、エリルのいる部屋に入る。レノールと何か話していたエリルは、二人が入ってくると顔を上げてため息をついた。

「なにか用ですか、アラン様。おまけもついているようですが」

「ちよつと進展があったから、話をしにきたんだよ」

「なんででしょうか」

「あの宿に厄介事が一つ増えた感じかな」

「またですか、あの宿も災難ですね。それで、どうされるのですか？」

「様子を見るだけだよ。簡単にどうにかできる連中でもないしね」

「それはそうですね。しかし、何もしないわけにもいかないと思いますが」

「だからここに来たんだよ。この町にも関わりのあることだろうし、自警団の協力もあつたほうがいいと思つてね」

アランとエリルの視線がレノールに集まる。レノールは額に指を当ててから、ため息をついた。

「それはまあ、あんたらには借りもあるし、協力はするけど。あんまり期待しないでお願いしたいな」

「変な噂とかが広まらないようにしてくれればいいよ」

「それならあたしの一存でもできる。でも、あまり派手にやられると限界があるね」

「ありがとう、それはできるだけ気をつけるよ。でも、いざとなつたらそうも言つてられないけど。ま、よろしく」

アランは言うだけ言うと背を向けて部屋から出て行った。残ったロニーは後頭部に手をあてながら、エリルに近づいた。

「あのー、俺を雇う件はどうなってるのかな」

「あなたはそんな簡単に調べがつくほど中身がないんですか？」

エリルの辛辣な一言にロニーは少し固まってから、苦笑いを浮かべた。

「わかった。俺もそこまで中身がないわけじゃないし、よろしく頼む」

「頼まれたくはありませんが、やることはやりますのでご心配なく」

「ああ、わかった」

ロニーはそう言って部屋から出て行った。それを見送ったレノールはエリルに向かって軽く笑ってみせた。

「こつちまで手伝ってもらってるし、あんたも大変だな」

「これが私の仕事ですから。それに、やりがいがありますよ」

「まあ、わかるがね」

二人は再び書類の整理などを再開した。

その頃、宿の部屋の中で何をするでもなく立つたまま窓から外を見ていたフィエンドは、背後に気配を感じたがその体勢のまま口を開く。

「ファスマイドか」

「久しぶりだね、フィエンド。君がこんなところにいるとは珍しいじゃないか」

「レモスライドが入れ込んでいるようだからだ。少し興味が出てきた」

「なるほどね。まあ、君達は知らないだろうが、あのアランっていう子には勇者、タマキ君とちょっと似たところがあるね」

「それは実力の話か？」

「実力ならタマキ君のほうがずっと上だと思うよ。まあ力の質は違うけど。それに性格というものでもない。似てるのはなんとなく雰囲気だね、人間離れたところというのかな」

「そうは見えないが」

「相変わらずの鈍さじゃないか。まあ、彼らの近くにいればそのうちわかるよ。せいぜい騒ぎを起こさないようにしておくことだね」

「大きなお世話だ」

「それじゃあ、僕はこれで失礼するよ」

ファスマイドはその言葉を最後にその場から姿を消した。フィエンドはそれから椅子に座った。

「おい、いるか」

そこにレモスイドがいきなりドアを開けて入ってきた。

「何の用だ。今ファスマイドが帰ったところだが」

「やっぱりあいつは来てたのか。で、何を言ってたんだ？」

「あのアランとかいうのが勇者に似ているそうだ」

「勇者にか。それでファスマイドが珍しく出てきたんだな。俺もいところろに居合わせたもんだ」

「お前はどつするつもりだ」

「俺はあいつらについておく。退屈しないですみそうだからな。それに、悪魔が関わっているような気もするんでな」

「悪魔？ 最近は姿を現していないようだ」

「そうだな、たしか勇者が姿を消してから出なくなってたからだった。今になって悪魔が出てくるのなら面白いだろう」

「それもそうだな。だが、あの連中に悪魔の相手ができるのか？」

「俺はそのためにもここにいるんだ。お前はなんのためだ？」

「知らんな。用が済んだのならさっさと出て行け」

レモスイドが部屋から出て行き、フィエンドはまた一人きりになった。レモスイドやファスマイドのように人間にはそれほど興味はないが、悪魔が関わっているというなら、ある程度はつきあってみてもいいと考えていた。

## でかい女の色々な時間

ティリスは食堂でバーンズと向かい合って座っていた。その隣にはレンハルトも座っている。

「あんなクソ魔族はどうでもいいから、あたしになんか助言はないのか」

「そうだな。力はあるが、まだ私でもさばけないほどではない。いや、さばくだけなら、レンハルトでもできるだろうな」

そう言われてティリスはレンハルトのことを睨みつけた。それについてレンハルトは若干引き気味になっている。

「いえ、私にそれができるかはわかりませんが、大体ティリスさんの力もわかりませんし」

「じゃあ、今から試してみるか」

ティリスは立ち上がろうとしたが、バーンズがそれを手で制した。「いたずらに暴れまわっても駄目だ。並みの魔物相手ならそれでもなんとかあっただろうが、それ以上のものを相手にするなら、もっとうまく力を使うべきだ」

「そんなもん、正面から思い切り殴ればいいことだろ」

「それだけでは駄目なのはエリルや私と戦ってみてわかっただろう。ティリス、君は力はあるのだから、それを最大限有効に使う道を考えなくては駄目だ」

「力か」

ティリスはつぶやいてから右手をぐつと握った。

「たしかにあたしは今まで正面からぶん殴るだけだった。戦い方なんて教わったことはなかったからな」

「だが、それで正解かもしれないな」

バーンズがそう言くと、ティリスは軽く首をかしげた。

「どういうことだ？」

「その力を生かす戦い方は自分で考えるしかないだろうということ

だ。魔族にも匹敵するような力では、今は誰も教えられる者はいないだろうからな」

「今は？　どういうことだ」

「勇者様達なら、可能だったろうがな」

「勇者か。一度会ってみたいもんだ」

ティリスは手を頭の後ろで組み、後ろにのけぞった。しかし、レモスイドが食堂に入ってくると、そのリラックスした姿勢をすぐにやめてしまう。だが、レモスイドはそれを意に介さず、バーンズに視線を向けた。

「さつきは邪魔が入って残念だったな」

「それはそっちの話だろう。私は別に残念だとは思っていない」

「そうか。だが、いずれその力を見せてもらおうとしよう」

それからレモスイドは宿の外に出て行ってしまった。ティリスはそれを歯を食いしばって見送る。バーンズはその様子を見ながら、レンハルトの肩に手を置いた。

「レンハルト、少し彼女につきあってやってくれ」

「私がですか？」

「そうだ。少し鍛冶屋でもものぞいてくるといい、もしかしたら彼女に合う武器が見つかるかもしれない」

「わかりました」

レンハルトは立ち上がると、ティリスに声をかけた。ティリスは渋々といった感じでうなずいてから、レンハルトと一緒に宿を出て行った。

それからしばらくして、二人は鍛冶屋に入っていた。ティリスは店内に並べられている様々な武器や防具をいちいち手にとって見ている。

だが、どれもしっくりこないようで、ティリスはいまいちつまらなそうな表情をしている。

「気に入ったものは見つかりましたか」

レンハルトは声をかけてみるが、ティリスは首を横に振った。



「どれもまともに使ったことなんてないし、簡単に壊れちまいそうだな」

「それは使い方にもよると思いますけど」

「これならけっこういいかもな」

ティリスは無骨なメイスを軽く持ち上げてみた。レンハルトはその様子を見て、うなずいてみせる。

「これは頑丈そうなメイスですね。重いのは難点でしょうか」

「この程度なら重くないぜ。でもなあ」

そこでティリスはメイスの柄を両手で握って力を加えた。柄が歪み始めるのを見て、レンハルトは慌ててそれを止める。

「それは売り物ですよ」

「ああ、そうだったな」

ティリスはメイスを元あった場所に戻した。

「ま、あたしが使うならもつとぶつとくつてでつかいものじゃないとな。なあおっさん、もっとすごいのはないのかよ」

おっさんと呼ばれた店主は苦笑いを浮かべる。

「お客さん、そのメイスだって普通は重いんだ。それより大きいものなんて、作ったところで買い手なんてつきませんよ」

「そうか。あれの三倍くらいあったら、あたしにはちょうどいい武器になりそうんだけどな」

ティリスの言葉に、店主は笑うどころではなく、あっけにとられてしまったようだった。

「いや、いくらなんでもそれじゃあ誰も使えませんよ」

「あたしなら使えるさ、そうだな」

そう言うってから、ティリスはさっきのメイスに加えて、そのまわりの剣や斧も両手でまとめてつかむと、それを軽々と持ち上げた。

「な？ 大丈夫だろ」

店主はその光景に驚き、しばらくの間言葉を失った。ティリスは持ち上げていた武器を置いてから軽く笑ってみせる。

「もしでかいのを作ってくれて言ったら、どうする？」

「いや、急には無理ですよ。そんなでかぶつは作ったこともありま  
せんし、時間も資金もどれだけ必要か見当が付きませんね」

「金か、あいにくあたしは持ってないんだよな」

それからティリスはレンハルトを見た。レンハルトは困惑したよ  
うに首を横に振る。

「それは私の一存ではなんとも。アラン殿に相談してみてもどうで  
すか」

「それもそうだな、ちょっと聞いてみてからにするか。じゃ、おっ  
さんまた来るぜ」

ティリスとレンハルトは鍛冶屋を後にした。それからティリスは  
町の広場に向かって適当な屋台で適当なものを買い食いし始めた。

「どうした、あんたも食べよ」

ティリスは金を出す気は全くなさそうだが、レンハルトにも間食  
をすすめた。だが、レンハルトは手を横に振った。

「いえ、私は結構です」

その返答にティリスは手に持った串から肉を一つ食べ、あきれた  
ような表情を浮かべる。

「あんた硬いな。一緒にいると息が詰まるとか言われたことないか  
？」

「それならありますよ」

「で、なんであんたはあの連中と一緒にいるんだ？　一緒に旅に出  
たってわけじゃないんだろ」

「お互い旅の途中で出会ったんです、偶然ですね」

「偶然ねえ。あたしの勘だと、必ずしもそうじゃない気もするけど」  
「まさか」

レンハルトは笑って否定したが、ティリスはその言葉を信用して  
いないようだった。

「まあいい、それよりあんたは盾を持ってるけど、それならあたし  
にも使えるかね」

「ティリス殿の力では、この盾では持ちませんよ。それに巨大な武

器を使うのなら、同時に使うのはいくらなんでも無理ですよ」

「そうだよな。まあどうせ使うんなら盾なんかよりも、でっかい棍棒みたいなほうが威力もあって使いやすそうだからな」

ティリスは最後の肉を食べると、串を店頭のゴミ入れに放り投げた。

「宿に帰ろうぜ。アランもそのうち帰ってくるだろ」

そう言ってティリスは宿に足を向けた。

## 急転

宿に戻る途中、ティリスは突然立ち止まって周囲を見回し始めた。  
「どうしました？」

レンハルトが聞くと、ティリスは手で黙るように制した。そしてしばらく立ち止まったままでいてから、おもむろに走り出す。

「ちょっと待ってください」

レンハルトは慌ててその後を追った。ティリスは止まらずにそのまま南門まで到達した。そのままスピードを緩めずにティリスは門を強引に突破する。門番が困惑している隙にレンハルトもそれに続いた。

外に出てしばらく進んだところで、やっとティリスは止まり、レンハルトはしばらくして追いついた。

「一体何があつたんですか」

「黙って待ってりゃわかるさ」

厳しい表情のティリスにそう言われて、レンハルトは念のために剣と盾を手にとった。

それから数分後、二人の目の前に巨大な黒いものがいきなり出現した。それはまるで巨大なオーガのような形をとり、二人の前に立ちはだかる。

「これは、あの新種の！」

レンハルトは剣と盾を構えるが、ティリスは腰に手を当てて笑みを浮かべた。

「そうか、こいつが噂の新種ってやつだな」

「気をつけてください、前に見たものとは違います」

「そうかい、それでこいつはそれよりも強いと思うか？」

「それはわかりませんよ」

会話する二人に魔物の腕にあたる部分が伸び、真上から襲いかかった。二人はそれをそれぞれ左右にかわす。

地面を打った腕が今度は横に動き、レンハルトに横薙ぎに襲いかかる。レンハルトはそれを盾で受け流したが、衝撃を殺しきれずによろめく。そして体勢を立て直す前に反対側からもう一度腕が襲いかかってきた。

「おらあ！」

それはティリスの拳が弾き飛ばし、そこからティリスは地面を蹴って、影の本体に突っ込んでいった。しかし、魔物の体が揺らいで穴が開き、ティリスはそこをすり抜けてしまう。ティリスはなんとか着地するが、殴りかかった勢いで地面を大きく削る。

「これは前のは違います！ 注意してください！」

「つまり強いんだな、面白いじゃねえか！」

ティリスはもう一度影に飛びかかったが、また同じようにすり抜けさせられてしまう。その着地した場所に魔物の腕が真上から振られた。だが、レンハルトがそこに飛び込み、盾でそれを受ける。

「なんなんだよこいつ！」

ティリスの大声の悪態に反応するように魔物の腕が引かれ、レンハルトは盾を構えなおした。

「攻撃は当るはずです！ 落ち着いてください」

「落ち着けて、何が言いたいんだよ！」

「正面からでは駄目です！」

「んなこたあわかってる！」

叫んだティリスは地面を蹴って上空高く跳び上がると、そこから急降下して魔物の中心に蹴りを打ち込む。それも開いた穴を通り抜けてしまうが、その隙にレンハルトが魔物の足に切りかかった。

剣は浅くはあったが魔物の体を切り裂いた。いくらかのダメージは受けたのか、魔物はレンハルト目がけて腕を振り下ろそうとした。だが、そこにティリスが横から強烈な一撃を食らわし、魔物の巨体は弾き飛ばされた。

ティリスは構え、魔物が起き上がってくるのを待とうとしたが、そうしている間に魔物の体は萎んでいつて消えてしまった。

「どうしたんだ？」

ティリスは構えを解いて首を捻った。レンハルトはまだ警戒していたが、何も無いのを確認すると剣を収めた。

「逃げられたみたいですね」

「チツ！ 張り合いのない野郎だ」

「しかし、なぜあの魔物が出現するとわかったんですか？」

「臭いだよ。それより戻ろうぜ」

ティリスは町のほうに足を向けた。

その日の夕方、宿の食堂でティリスは魔物のことをアラン達に話した。

「それで、一人で暴走して魔物を取り逃がしたわけですか」

エリルにそう言われて、ティリスは不機嫌そうな表情になった。

「けっこう手強い奴だったんだよ、なあレンハルト」

話をふられたレンハルトは首を縦に振った。

「ティリス殿の言う通りです。例の新種の魔物でしたが、今までのものよりもかなり力が強いものでした」

「レンハルトさんがおっしゃるなら、その通りなのでしょうね」

その扱いの違いにティリスはさらにむくれてしまう。

「まあまあ、さらに新しい魔物っていうことなら、二人の意見をちゃんと聞いたほうがいいよ」

とりあえずアランがとりなしてその場はおさまる。

「で、その魔物はどこに逃げたんだと思う？」

「さあな、近くに出たんだから、この町に来ようとしてたんじゃないのか？」

アランはうなずいて腕を組む。

「だろうね。でもなんでこの町なのかな。僕達が来てから色々あったわけだけど」

「やはりあの魔族達が原因なのでしょうか」

バーンズの意見にエリルは静かに首を横に振った。

「一因かもしれませんが、それだけが原因とは思えません。もしかしたら、何かもつとほかの、大きな目的の中の一つの動きにすぎないのかもしれませんが」

「でもそこまで大きな話になると、ここじゃなにもわからないんじゃないかな」

「確かにそうかもしれませんがね。しかし、アラン様のおっしゃる通りだとしても、どうすればいいのか見当が付きません。私のほうでも決定的な手がかりはまだつかめていませんし」

エリルがそこまで言うつと、その場の全員がしばらくの間黙り込んだ。その沈黙を破ったのはティリスがテーブルを叩いた音だった。

「うじうじ考えててもしょうがねえだろ。どうせならもつとでかい町に行くとか、とにかく動かなきゃ駄目じゃねえか」

エリルはそれにたいして眼鏡の位置を直してからため息をついた。「そんな考えでどうにかなると思えませんが、この状況ではそれもいいかもしれませんね。あの魔族達も連れていければ、この一連の動きがどんなことなのかわかるかもしれません」

「つまり、お前は私達か、あの魔族達の誰かを目的として動いているものが黒幕だと、そう考えているのだな、エリル」

「はい、バーズ様。この町の自警団に妙な動きが出てきたのは、ちょうど私達があの村に入ってからのことらしい、という情報もありますし。その後のことも考えれば偶然で片付けるわけにもいきません」

そこでアランはうなずいてから口を開く。

「それは一種の賭けだよな。やってもいいと思うけど、この町を放つていつて大丈夫かな？」

「確かに心配ですね。それは私がレノールと相談しておきましょう」  
「別に、僕達のうちの誰かが残るのもありんじゃないの？」

「いつまでもここに滞在するというわけにはいきませんし、戦力を減らすわけにもいかないと思います。そうですね、シェーラ様に連絡をして少し人を送ってもらうのがいいのではないのでしょうか」

「ああ、それもいいか。父さんもシェーラになら任せるだろうからね」

「では、それは私が連絡をしておきます」

「じゃあ、出発するなら目的地を決めないとね。それより、そろそろ夕食にしよう」

アランの言葉を合図に、とりあえず議論は打ち切られ、テーブルには食事が並べられていった。そんな中、アランはティリスの横に移動した。

「ところでティリス、君は僕たちと一緒に来るのかい？」

「ああ、お前がいいって言うんなら、一緒に行きたいな」

「もちろん、歓迎するよ」



## 町から出発

数日後、出発の準備を整えたアラン達は宿を引き払う準備をしていた。ちなみにティリスの武器の件はあっさりエリルに却下されている。

アランは今まで放っておいたレモスイドの部屋を訪れていた。ドアをノックして開けると、レモスイドは椅子に座っていた。

「ちょっといいかな」

アランが声をかけると、レモスイドは椅子に立てかけてあった曲刀を手に取り、ゆっくりと立ち上がった。

「出発の準備をしてるらしいな。どこに行くつもりだ？」

「ブレイテンロック共和国だよ、けっこう近いしね」

「なるほど、それなら俺も一緒に行つてやろう。何があるか楽しみだからな」

「まあ、大歓迎ってわけじゃないけど、来たいならどうぞ」

「そうさせてもらおう」

楽しそうに笑うレモスイドをおいて、アランは今度はフィエンダの部屋に向かった。ドアをノックすると、開けるよりも早くドアが開かれ、フィエンダが顔を出してきた。

「なんだ」

「今日ここを発つんだ。一緒に来るかと思ってね」

「一緒になど行く気はないと言いたところだが、もう少しお前達につきあってやろう」

「そうかい。それで、ファスマイドはどこにいるのかな？」

「知らんな。だが、あいつならどこかで見ているだろう」

「そういうことなら、別に放っておいてもいいのか。それじゃあ、また」

「待て」

フィエンダはその場を立ち去ろうとしたアランを引き止めた。

「お前は、自分よりも強大な者が現れたらどうする」

「特にどうってことはないさ。僕には仲間もいるし、考える頭もある。それに相手が強かったって、あきらめるわけにはいかないんだから」

「なるほどな」

それだけ言うとフィエンダはドアを閉めた。アランは軽く鼻の頭をかいてからその場を離れる。

それから宿の外に出ると、そこにはバーンズとロニーがいた。エリルから特に問題なしと判断が出たロニーはアラン達と一緒に来ることになり、荷造りの仕上げに駆り出されているところだった。

「やってるね」

アランが声をかけると、ロニーは汗を腕で拭って顔を上げた。

「雇ってくれたのはいいけどよ、いきなり重労働だな」

「まあ、そう言わずにさ」

アランはロニーに布を渡してからバーンズに顔を向けた。

「準備はどうか」

「大体完了しました。それと、荷物が増えたので馬を増やしましたから、今までよりも旅のペースは上げられます」

「それなら、目的地にもすぐに着きそうだね。ところで、ロニーは本当にこの町を離れていいのかい？」

「別に問題ないぜ。きっちり前金ももらってるし、俺の相棒の活躍を見せてやるよ」

ロニーは背負ったポールアックスを親指で指した。

「楽しみにしてるよ。僕はちょっと野暮用を済ませてくるから」

アランは二人と別れ、町の外に向かった。そして人気のない場所までくると、空を見上げ、口を開いた。

「見てるんだろ、ここなら人目もないから少し話をしよう」

「何の用かな」

アランの背後から声がした。振り向くとそこにはファスマイドがリラックスした様子で立っている。

「あなたなら、何か僕達の知らないことを知ってるような気がするんだ。全て教えるとは言わないから、僕達がやることが間違っていないかどうか、それだけでも教えてくれないかな」

「君達が間違っているかどうかね。それなら心配しなくても大丈夫だよ」

「それは、間違っていないってことでもいいのかな」

ファスマイドはそれには答えず、ただ笑顔だけを浮かべた。アランはその顔をしばらく見つめてから、うなずいた。

「わかった。間違っではなさそうだね」

アランはファスマイドに背を向け、その場から立ち去った。それを見送ったファスマイドはしばらくしてからおもむろに自分の右手に雷をまとわせ、それを空中に放った。その雷は空中にある何かを撃ち、蒸発させた。

「さて、どうなるか楽しみなことだね」

一方、エリルはティリスとレンハルトを伴って主に食料の調達のために市場に来ていた。主に荷物を抱えているのはティリスで、本人はそのことに不満を持っているようだった。

「なあ、なんであたしが荷物持ちなんだよ。レンハルトは軽そうなもんばかりじゃねえか」

「あなたが一番力があるでしょう。それにレンハルトさんが持っているもののほうが価値はあるものが多いですから、心労は大きいんですよ」

「チツ！ まあいい、あとは何を買うんだ」

「あとはあそこの店で終わりです」

「ああ、早く終わりにしてくれよ」

賑やかで山のような荷物を抱えて注目を集めているティリスだったが、本人は気にせず、レンハルトもそれを穏やかに見ているだけだった。

買物が終わると、一行は荷馬車の場所に戻り、荷物の積み込みを

始めた。それが終わる頃になると、バーンズとロニーが荷物を持ってきた。

「アラン様はどうされたのです？」

エリルが聞くとバーンズが首を横に振り、ロニーが口を開いた。

「少し用があるってどこかに行っただけだな」

「そうですか。それならアラン様が戻る前に出発の準備を済ませてしましましょう」

そうして荷積みと整理をしていると、アランが戻ってきた。だが、エリルはそれを見て眉をしかめる。

「アラン様、何か余計なものがついてきているように見えるのですが」

「え？ まあいいじゃないか、一人くらい」

「連れてくるなら、せめて人間にして頂きたいのですが」

「そう言うな。善良な人間のようにおとなしくしてやろう」

レモスイドはアランの背後から、エリルに向かってにやりと笑う。エリルはため息をついてから、荷馬車の胴体を一発叩いた。

「わかりました。そういうことなら、くれぐれもおとなしくしてください。おかしなまねをしたら、容赦はしませんよ。それから、必要なものは自分で用意してください」

「それは楽しみだ。まあ、せいぜい気をつけておくようにしよう」

レモスイドはまるで気にもとめない様子で笑ったままうなずいた。エリルはため息を一つついてから、再びアランに顔を向ける。

「まさか、これ以上増えるようなことはありませんよね」

「とりあえずはないはずだよ。あとの二人は僕達と一緒に行動するような性格でもないだろうから」

「それだと助かりますね。これ以上大所帯になったら無駄に目立ってしまいますから」

それからレモスイドを除く全員で荷造りの仕上げをしていると、レノールがやってきた。

「はかどってるじゃないか。もう少しゆっくりしてって明日出発

「してもいいと思うけど」

「そうのんびりもしていられませんか」

エリルはそう答えてから荷馬車の御者台に登った。

「では私たちはこれで。とりあえず手はうっておきましたが、あとはあなた達次第ですよ」

「ああ、わかってる。あんた達も気をつけてな」

## ブレイテンロック共和国

今回の旅路はアカーナへの旅とは違い、穏やかで何事も起こらなかった。レモスイドも特に何もするようなことはなく、たまにティリスの相手もしてやつたりしていた。

国境を越えるのも問題なく済み、一行は共和国の首都に無事に入っていた。宿を確保してから、アランとバーンズはすぐに出かけていった。

「なあ、二人はどこに行つたんだ？」

荷物の整理をしながら、ロニーはエリルに尋ねた。

「この国にはアラン様やバーンズ様の知り合いがいるんですよ。話を通しておくと色々と便利ですから」

「つていうことは、その知り合いはお偉いさんなのか」

「そうですね、そういうことになります」

「はー、そりやすごいな」

レンハルトは二人の会話を聞きながら、アランとバーンズが会いにいった人物が誰なのかを考えていた。レモスイドは特に何をするでもなく、その三人の様子を見ているだけだった。

一方、アランとバーンズはこの都の高級住宅街に足を踏み入れていた。二人は並んだままゆっくり歩き、一際大きな敷地を持つ屋敷の前で足を止めた。それからバーンズが門番に近づく。

「私はノーデルシア王国から来たバーンズだ。主人に取り次いでもらいたい」

バーンズは背中中の剣を鞘ごと手に取り、それを門番に差し出した。

「この剣を見せればすぐにわかるはずだ。よろしく頼む」

「わかりました」

門番の一人はバーンズの様子に気圧され、剣を受け取るとすぐに屋敷に入ってしまった。しばらくしてから剣を持った門番が戻ってくると、それをバーンズに返し、門を開けた。

「どうぞ」

バーンズとアランが門をくぐると、中年の執事が二人に向かって頭を下げ、屋敷の中に迎え入れた。それから二人は屋敷の中にある一室に通され、ゆったりとした椅子に座って主人を待った。

数分後、ドアを開けて現れたのは立派な身なりをした筋骨隆々の色黒な中年の男だった。その男はバーンズを見ると、いかつい顔面いっぱい笑顔を浮かべた。

「久しぶりだな、バーンズ殿」

「はい、トルビン様。お久しぶりです」

それからトルビンはアランに目を移し、愉快そうに目を細める。

「アラン様も立派になりましたな」

「相変わらず暑苦しいね、トルビン」

「ハッハッハッ！ いつもながらはつきりしたお方ですね」

豪快に笑ってからトルビンは二人の向かい側に腰を下ろした。

「さて、アラン様のご事情は私も知っていますが、我が国にはどういったご用で？」

「どこから話せばいいのかな。まあ問題があるのはわかるんだけど、どうすればいいかわからないってことがあるんだ。ちょっと詳しく言っと、魔族が悪魔の問題なんだけどね」

「魔族に悪魔とは、穏やかではありませんな。しかし、最近その手の話はあまり聞きませんでした」

「トルビン様、新種の魔物の噂はご存知ですね」

バーンズが答えるとトルビンはうなずいた。

「ああ、それなら知っている。我が国でも報告されているしな」

「もしかすると、その魔物が魔族か悪魔と深く関わりがある可能性があります。私たちはそれを調べるためにここまで来たのです」

「そういうことか。だが、なぜ我が国に？」

「いや、近かつたし、知らないところでもないからね。それに、僕の勘ではここに何かあると思えるんだ」

「勘？ いや、全くアラン様らしいですな。しかし、あなたの勘な

らば無視するわけにもいきませんな」

トルビンは腕を組み、目を閉じて少し考えこんだ。数十秒後、目を開けたトルビンは穏やかな表情になってから深くうなずいてみせる。

「そういうことなら、協力させてもらいましょう。執政には私から伝えておきます。何が起こるかわからないのならば、連絡は絶やさないようにしておきましょう」

「そうだね。宿は教えておくから、誰か連絡役を寄越してくれればいいよ」

「わかりました、そうさせてもらいます。ところで」

トルビンはそこで言葉を切り、二人の顔を見つめると、にやりと笑った。

「少し手合わせを願えますかな」

それを聞いたアランは立ち上がった。

「いいよ。とは言っても、そっちが手合わせしたいのはバーンズのほうかな」

「それは確かにそうですね。よろしいかな、バーンズ殿」

バーンズは立ち上がり軽く頭を下げる。

「わかりました。よろしく願います」

「じゃ、僕は先に帰らせてもらうよ。着いたばかりだしね」

アランはそう言ってさっさと一人で帰ってしまった。それを見送ったトルビンは大きく息を吐き出した。

「アラン様をこうして旅に出されるとは、エバンス王は思い切ったことをするものだな」

「それだけアラン様に期待し、信頼しているということですよ」

「個人的にはどう思うかな？ バーンズ殿」

「アラン様の力はこうした状況のほうが生かされると思います。あの方には王子という地位も、王宮も束縛にしかないでしょうから」

「同感だ。アラン様は以前よりも生き生きしているように見える。」



それよりバーンズ殿、早く我が家の道場に行こうではないか」

それから二人は一緒に部屋を出ていった。

一方、トルビンの屋敷を出たアランは、町を見物しながらふらふらと宿を目指していた。ノードルシア王国ほどの華やかさはないが、このブレイテンロック共和国の首都は穏やかな雰囲気で美しい都市だと言えた。

アランは広い公園に來ると、ベンチに座ってそこにいる人々を眺め始めた。公園には要所要所、武装した警備兵が立っているが物々しい雰囲気はなく、老若男女様々な人々がいて、思い思いに時間を過ごしているように見えた。

「ま、いいところだね」

そうつぶやき、アランは立ち上がった。それから足を宿に向け歩き始める。そして数十歩進んだ時、後方から爆発音が響いた。

アランはすぐに振り返り走り出す。さっきまでいた公園からは爆発の名残の煙が立ち上り、突然のことになり混乱した様相を呈していた。

その中心地から巨大な黒いものがいきなり立ち上がり、あっという間に人間の三倍くらいのサイズになって二本の腕のようなものが生えた。そして、その腕が爆発にうずくまっていた若い男女に振り下ろされる。

「水よ！」

アランの気合と共に逆手で抜き打ちした右手のナイフから水の刃が走り、それを真つ二つにし、消滅させる。巨大な黒いものはそれに怯んだ様子を見せず、間髪入れずに反対の腕を振りかぶった。だが、アランは素早く狙われていた男女の前に入り、右手のナイフを構える。

そして襲いかかってきた腕を切り裂くと、そのまま前方に走り、左の掌を斜め上に向け、黒いものに突きつけた。

「バースト！」

爆発が黒いものを撃ち抜くと、それはそこを中心として霧散して

いった。アランは他に何も出てこないのを確認してからナイフを収め、うずくまっていた二人を助け起こした。

二人は突然のことに言葉もないようだったが、とにかくアランに礼を言つて、近くのベンチに支えあいながら歩いていった。それと入れ違いのように警備兵がアランに近づいてきた。とりあえずアランは先手を取つて口を開くことにする。

「僕は旅の者でね。話なら宿に来てくれればするから、とりあえずここはよろしく」

それだけ言つて宿の名前を告げると、逃げるようにその場から立ち去った。

## 計画と相談

アランが宿に戻ってくると、ちょうどエリルが下に降りてきているところだった。

「ああエリル、ちょっといいかな」

「なんですか？」

「今、街中で一騒動あったんだけど」

「何か騒がしいと思ったら、そういうことですか。それで、何をやってきたんですか？」

「魔物の相手をしてきたただだよ。まあ、ちょっと目立ったとは思うけど」

「ちよつとですか、本当にその通りならいいのですが、まさか一人で魔物に立ち向かった後、さつさと立ち去ってきた、ということではありませんか」

「まるで見てきたみたいだね」

「やっぱりそういうことでしたか」

エリルはわざとらしく額に手を当ててため息をついてみせた。

「このまま知らないふりをしているわけにもいかないでしょうね」

「まあ宿の場所は教えてきたから、向こうから接触してくるはずだよ。それに、トルビンにちょっと手を貸してもらうことになると思うけど」

「来て早々に迷惑をかけることになるんですね。大事にならなければいいのですが」

「なんにせよ、何もしないよりはマシだと思うよ。まあすぐにトルビンのところから連絡係が来ると思うから、その時に相談してみよう」

「その前にアラン様の身元がばれなければいいですね」

「そうだね。それより、部屋は？」

「それなら、もう大丈夫ですよ。アラン様の部屋は一番角でロニー

さんと一緒です」

「じゃあ、ちよつと一休みさせてもらうよ」

アランはそれから二階に上って教えられた部屋に入った。室内ではロニーがベッドに腰かけて自分のポールアックスを磨いているところだった。アランが入ってきたのを見て、手を止めてポールアックスをベッドの上に置く。

「思ったより遅かったじゃないか」

「まあね、ちよつと寄り道してたし」

そう言ってから、アランは自分のベッドに身を投げ出した。

「これからちよつと忙しくなるかもね」

「どういうことだ？ 何があつたんだよ」

「すぐにわかるよ。ちよつと休むから、夕食に起こしてくれないかな」

「ああ、わかった」

アランはろくに着替えることもせず、そのまま目を閉じた。

そのまま時間は経過して、アランがロニーに起こされた時には夕食の時間になっていた。二人で下に行くと、すでにバーンズも帰って来ていて食卓についていた。

「おかえり、あっちのほうはどうだったかな」

アランが椅子に座りながらそう聞くと、バーンズは多少疲れたような様子で口を開く。

「さんざんつき合わされました。それより、街中で魔物が出たようですが、ご存知ですか？」

「それなら、アラン様が詳しいことをご存知です。なにしろその魔物を相手にしてきたのですから」

エリルの言葉に一行の視線がアランに集まった。アランはそれを受け、お茶を一杯飲んでからその場の全員を見回した。

「公園でいきなりあの黒いだけの魔物が突然出てきたんだ。それが人を襲おうとしたから、ちよつと止めて来たんだよ」

「チッ！ そうことならあたしも一緒に行つてりゃよかったな。今

度こそ逃がしやなかったのに！」

ティリスが悔しがるが、エリルはそれをしらけた目で見る。

「街中ではあなたの戦い方では駄目ですよ。魔物よりも被害が大きくなりますからね」

ティリスはむくれて黙ってしまふ。そこで今度はレンハルトが問いを發した。

「魔物は我々がここに来る前は出現していたのでしょうか？」

その問いにはバーンズが首を横に振った。

「いいや、少なくとも街中に魔物が出現したということとはなかったようだ。もしかしたら我々がそのきっかけになったのかもしれない」  
「それじゃあ、俺達はまるで疫病神みたいじゃないか」

ロニーは何か釈然としていない様子だった。だが、アランは特にそれを気にしない様子で、皿の料理を一つ取って口に放り込む。

「別にそういう話でもないさ。目的がなかったらなかったで、好きに暴れるかもしれないだし、むしろ僕達の前に現れてくれるのは都合がいいくらいだよ」

「そういう考え方もあるか。確かに、倒そうっていうんなら、近くに出てきてくれたほうがやりやすいよな」

「そういうこと。それに、ここならある程度の協力だって見込めるんだ」

「協力？　そういえば誰かお偉いさんに会ってきたんだっけな。そんなすごいのと話をつけてきたのかよ」

「まあね。いずれわかるから楽しみにしておいてくれればいいよ」

そこで、それまで黙っていたレモスイドがにやりと笑った。

「さすがに面白いな」

アランはレモスイドに顔を向ける。

「できれば協力してもらえると嬉しいんだけどね」

「気が向いたらな。それまではお前達がどうするか見物させてもらおう」

「まったく、使えませんか」

エリルが毒づいたが、レモスイドはそれを軽く聞き流した。

「姿は見えないがファスマイドもフィエンダも近くにいるだろう。あいつらもおもしろくなってくれば介入してくるかもな」

「ご期待に沿えるように頑張るよ」

その後、夕食は何事もなく進み、アランは自分の部屋に戻らず、散歩に出発した。

夜の街はそれなりに明かりがあつたが、さっきの魔物の出現のせいか人通りは少なかった。だが、警備兵はそれなりにいて、治安が悪化している雰囲気はない。

そうしてしばらく歩いてから、アランはおもむろに狭い路地に入つていった。そうすると、突然その背後に人影が現れた。

だが、アランが振り返らずに足を止めると同時に、さらにその人影の後ろからエリルが姿を現し、人影の首筋に手をそえた。

「まず、あなたの身元を教えて頂きましょう」

人影はおとなしく両手を上げた。

「ご安心ください。私はトルビン様の使いです」

アランはゆっくりと振り返ると、腕を後ろで組んで、エリルに目配せをする。エリルは手を引いてから一歩下がった。

「宿じゃ人目も多いし、僕が外に出るまで待っていてくれてよかったよ」

その一言に、トルビンの使いはその場に片膝をついた。

「トルビン様からご連絡をお伝えします。まず、公園でのことは手をまわしておいたので、警備からアラン様に接触することはありません」

「なるほどね、それは助かるよ。それで、当然それは取引なんだと思っけど？」

「はい。それにつきましては、明日トルビン様の屋敷に来て頂きたいのですが」

「わかった。それについては明日ゆっくり聞かせてもらつよ。昼頃に行けばいいのかな」

「はい。お待ちしております」

そう言ってトルビンの使いはその場から姿を消した。アランはしばらくその先を見つめてから、足を動かし始める。

「ところでエリル、トルビンはどんな取引を持ちかけてくると思う？」

「強かな方ですから、かなり思い切ったことをするかもしれませんね。本当に大丈夫なのですか？」

「まあ、考えすぎてもしょうがないよ。明日になればわかるさ」

二人は宿への道を戻りだした。

## 執政

ブレイトンロック共和国の現在の元首である執政、上品な白髪のマグダレンは執務室でトルビンの部下からの報告を聞いていた。話を聞き終わると一人になり、机の上に肘をついた。

公式には地位を廃され、旅に出たというノーデルシア王国の王子、アラン。だが、マグダレンはその本当の目的をエバンス王から知らされている数少ない人物だった。

そのアランがこの国に来たその日に、街の公園で魔物が現れ、それをアランが撃退した。それをただの偶然と片付けるわけにもいかない。

とりあえず当面のところはトルビンが手をうつたようだが、このまま任せきりにしておくわけにもいかない。それに、魔族や悪魔が絡んでいるのなら、国として何も対応策をとらないわけにもいかなかった。

「さて、これは私の一存では決めかねますね」

それからマグダレンは机の上のベルを鳴らした。すると、ドアが開かれ髪が長い、一人の若い感じの女性が部屋に入ってきた。

「お呼びでしょうか」

「アンネット、今日のことでは知恵を借りたいのですが、状況はわかっていますね？」

「はい。私としましては、ここはアラン様に骨を折って頂くのがいいのではないかと思います」

「それはどういうことです？」

「アラン様の存在を公表し、魔物との戦いの前線に立って頂きます。ノーデルシア王国は我が国とは長く友好関係にありますし、従者のバーンス様は騎士として名高い方ですので、人々の不安を払拭するのに役立つと思われます」

「なるほど、それはいい手です。それならば表立ってアラン様を私



たちで支援できますから、あまり強力な戦力がない我々にとっても都合がいいですね。では、その方向でお願いしますよ」

「はい」

アンネットは頭を下げると退室していった。

翌朝、アランは枕元に立つ気配で目を覚ました。頭を動かしてみると、ファスマイドが枕元で椅子に座っていた。

「やあ、おはよう」

アランはその挨拶に上体を起こした。ロニーのほうを見てみると、ぐっすり眠っているようで、まったく起きる気配はない。

「彼には少し魔法をかけさせてもらったよ。少し君と話をしたかったからね」

「一体何の用かな？ 僕はもう少し寝たいんだけど」

「まあそう言わずに、耳寄りな情報を持ってきたんだよ」

アランは黙ってうなずいてみせた。

「さて、昨日の君の戦いは当然この国の中枢に伝わって、早速どういった対応をするかが決められたわけだけど、知りたいよね？」

「それはまあ、知っておいて損はないかな」

「そう言うと思ったよ。まず、君の存在は公表され、魔物との戦いの最前線に立つことになる。もちろん、強制はされないけど、君なら受けるだろう？」

「もちろん。それは僕達にも都合がいいからね」

その返答を聞いたファスマイドは満足そうにうなずく。

「まあ面白そうなことをやってくれるんだから、君には少し協力してあげよう。もっとも、この件に関してはどうやら僕が最初に考えていたよりも根が深くて、まだわからないことが多くてね。今はまだ君達に教えて上げられることはない」

「そういうことなら、別に焦っていないからまた後でいいよ。それより、まだ寝たいから出て行って欲しいんだけど」

「それじゃ、また会おう」

そうしてファスマイドは最初からその場に最初からいなかったかのように姿を消した。アランはそれから目を閉じて二度寝に入った。だが、それはすぐに部屋のドアが開けられた音で遮られてしまう。「アラン様、今日は忙しいんですから、いつまでも寝ていてもらっては困ります」

エリルの大声にアランは仕方ないといった様子でベッドから起き上がった。ロニーも目をこすりながら上体を起こす。

「エリル、僕だけじゃないんだから、突然入ってきてもらっちゃ困るよ」

「私はかまいません。さあ、二人とも早く起きて下に来てください」それからエリルは二人が起き上がるまで待ち、それを見届けてから部屋を出て行った。

「嬉しいような、そうじゃないような気分だぜ」

「そうかい？ そのわりにはけっこう嬉しそうに見えるけど」

「まあな、俺みたいな稼業だとこんな風に起こしてもらえるなんて中々ないんだよ」

「なるほどね」

二人は手早く着替えると下に降りていった。すでにレモスイド以外のメンバーはそこにいたが、ティリスだけは今にも眠りに落ちそうに見える。

朝食はすぐに済み、そのまま昼までは自由時間として、アランは思う存分二度寝できた。

そして昼頃になると、アランはバーンズとエリルを伴ってトルビンの屋敷に向かう。三人は今度はすぐに通されると、トルビンの私室に案内された。その部屋の主はすでにそこで待っていて、三人を迎えた。

「さて、今日は私の他にも重要な人物が来ていましてな」

トルビンが手を叩くと、執事がドアを開けて一人の男を部屋に招き入れる。その男、マグダレンは優雅にアランに向かって一礼をしてから微笑みを浮かべた。

「お久しぶりですね、アラン様」

「そうだね、久しぶり。前よりも白髪が増えたんじゃないの？」

「そうですね、今の立場ですと色々と気苦労が多いものですから。」

しかし、私には優秀な助手がいますので、苦労も半分と言ったところですよ。せっかくいい機会ですから、紹介しておきましょう。入らないさい」

再び執事がドアを開けると、今度はアンネットが部屋に入ってきた。なぜわざわざ別々に入ってきたのかということに関して、エリルは気にしないことにしておいた。

「お初にお目にかかります。私はアンネット、マグダレン様のお側に仕えている者です」

アランはなんとなくエリルの顔を見てから、アンネットのほうに再び顔を向けた。

「さしずめ知恵袋つてとこかな。それで、どんな案が出てきたのかな？」

アンネットが伺いを立てるようにマグダレンを見ると、それにはうなずきが返される。

「私としましては、アラン様の存在を公表し、我が国の総力を持つてその援護をするという方向で進めていきたいと思っております」

「つまり、アラン様が先頭に立って脅威に立ち向かう、ということですか」

エリルが尋ねると、アンネットは穏やかにうなずく。

「はい。残念ながら我が国にはアラン様やあなた方のような強力な戦力となる方はいません。対魔族においては多くの戦力よりも、少数精鋭で当るのが有効だというのは、過去の事例からも明らかです」  
「なるほどね、それは僕達にとっても願ってもないことだ。だって、好きにやつてもそのフォローをしてもらえるってことだよな」

「はい。もちろん全力でバックアップいたします」

それを聞いたアランは笑顔で手を叩いた。

「よし！　そういうことなら、派手にやらせてもらおうかな」

マグダレンはそのアランの一言に穏やかな笑顔を浮かべる。

「できるだけお手柔らかにお願いしますよ」

「まあできるだけ頑張ってみるよ」

それから六人の会議は続き、様々なことが語られていった。

### PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6790u/>

---

明日の王子 - ノーデルシアの勇者 第三章 -

2011年10月7日22時27分発行